

たか だ うえ の だん
高田上ノ段遺跡

発掘調査報告書

1986

掛川市教育委員会

文化係



たか だ うえ の だん
高田上ノ段遺跡

発掘調査報告書

1986

掛川市教育委員会

序にかえて

掛川市の北域にひろがる豊かな樹林のあいだから流れる原野谷川は、掛川市内で最も規模の大きい河川の一つであります。

そして、原野谷川の流域は、市内を流れる他の河川流域にくらべ、原始・古代からの貴重な遺跡が多く所在することでもよく知られております。

往古の人たちが肥沃な、水の利のよい適地を求め、集落を形成したことが地道な発掘調査の積み重ねから少しずつ明らかになってきております。

このたび、老化した茶樹の改植に伴なって事前に緊急発掘調査した高田上ノ段遺跡は、原野谷川右岸の段丘なかほどに営まれた規模の大きい縄文時代から古墳時代にかけての集落跡の一部であります。

調査の結果、縄文時代・弥生時代の遺構のほか古墳の周溝が発見されて、前方後円墳の周辺遺跡を解明する手がかりとなったことは大きな成果の一つであります。

本遺跡の調査にあたり、埋蔵文化財の保存に深いご理解とご協力をいただいた土地所有者をはじめ、隣地の方々、調査のご指導をいただいた関係者の方々に対し心から感謝を申しあげるとともに、本書が潤いのある文化都市づくりや郷土の歴史・生涯学習推進に役立てば誠に幸甚であります。

昭和61年 3 月 吉日

掛川市教育委員会
教育長 伊 藤 昌 明

目 次

序	
例 言	
凡 例	
I 発掘調査と遺跡の概要	2
1. 調査に至る経過と調査の目的	2
2. 調査の方法と経過	2
3. 遺跡をめぐる環境	5
II 調査の内容	7
1. 遺 構	7
i 竪穴式住居跡 (S B)	9
ii 土 坑 (S F)	9
iii 小 穴 (S P)	16
iv 溝 (S D)	22
2. 遺 物	24
i 縄文時代	24
ii 弥生時代	24
iii 古墳時代	26
iv 近 世	30
III 成果と課題	31

挿 図 目 次

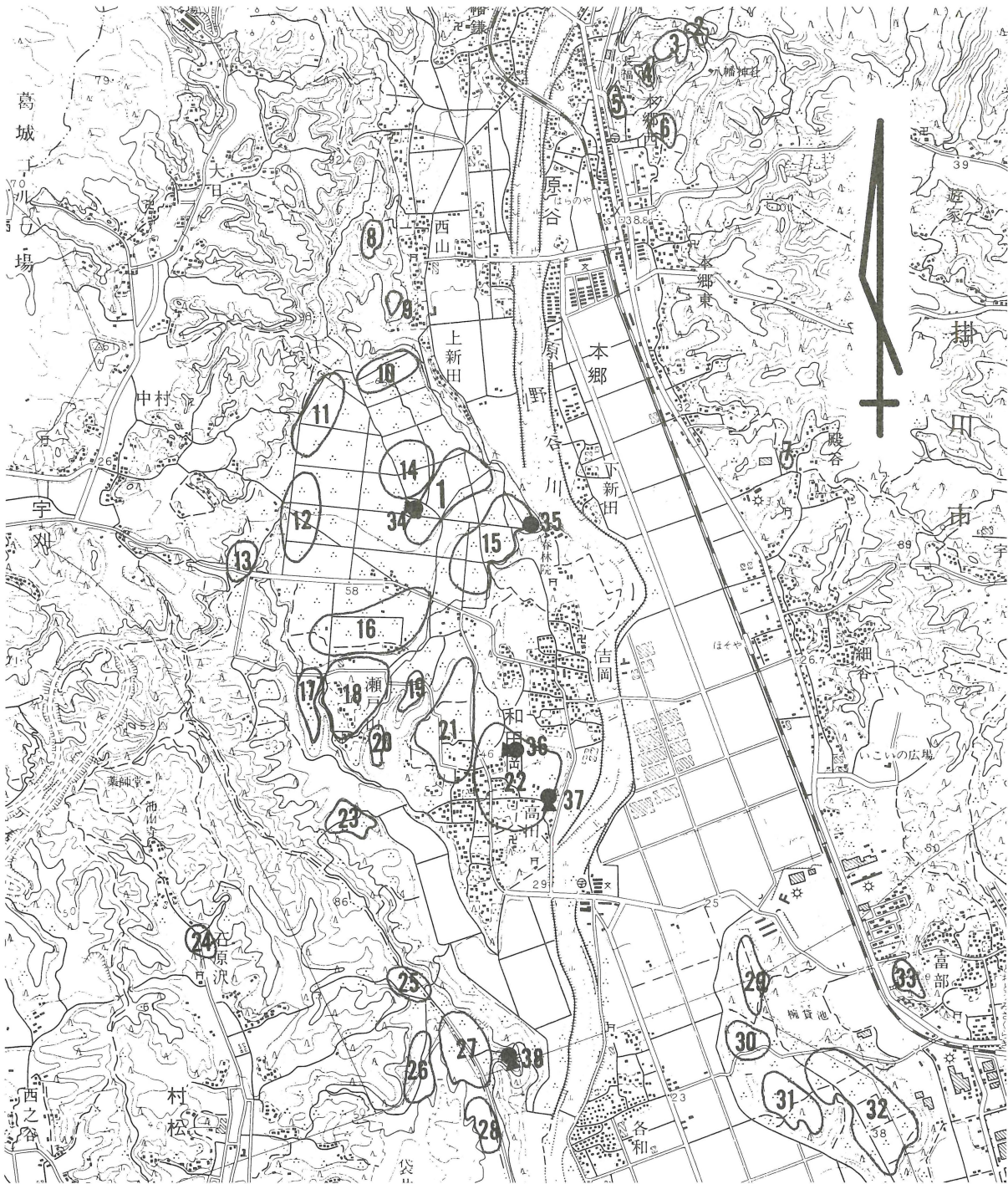
第1図 高田上ノ段遺跡の位置と周辺遺跡	1
第2図 周辺地形と遺跡分布	4
第3図 今坂遺跡の出土遺物	5
第4図 調査区の土層柱状図	7
第5図 遺構全体図	8
第6図 S B 01 実測図	10
第7図 S F 01 実測図	11
第8図 S F 02 実測図	11
第9図 S F 03 実測図	12
第10図 S F 05 実測図	13
第11図 S F 07 実測図	13

第12図	S F 08 実測図	14
第13図	S F 09 実測図	15
第14図	S P 実測図(1)	17
第15図	S P 実測図(2)	18
第16図	S D 01 実測図	19
第17図	S D 02 実測図	20
第18図	S D 03 実測図	21
第19図	S D 03 土層断面図	22
第20図	S D 06 実測図	23
第21図	出土遺物実測図(1)	26
第22図	出土遺物実測図(2)	27
第23図	出土遺物実測図(3)	28
第24図	出土遺物実測図(4)	29
第25図	出土遺物実測図(5)	30

図 版 目 次

図版 I	(上) 遺跡遠景 (航空写真、調査地点矢印交点)
	(下) 調査区全景 発掘調査前 (東から)
図版 II	(上) 調査区全景 前半分完掘状況 (東から)
	(下) 調査区全景 前半分完掘状況 (西から)
図版 III	(上) 調査区全景 後半分完掘状況 (東から)
	(下) 調査区全景 後半分完掘状況 (西から)
図版 IV	(上) 調査区土層確認状況(1) (調査区北西隅)
	(中) 調査区土層確認状況(2) (調査区西壁)
	(下) 調査区土層確認状況(3) (調査区南壁)
図版 V	S B 01 床面検出状況 (北から)
	S B 01 完掘状況 (北から)
	S B 01 炉検出状況 (西から)
	S B 01 炉完掘状況 (西から)
図版 VI	(上) S F 01 土層確認状況 (西から)
	(中) S F 01 完掘状況 (西から)
	(下) S F 02 完掘状況 (東から)
図版 VII	(上) S F 03 礫出土状況 (東から)
	(中) S F 03 礫出土状況 (南から)
	(下) S F 07 完掘状況 (西から)
図版 VIII	(上) S F 08 土層確認状況 (西から)
	(中) S F 08 土層確認状況 (北から)
	(下) S F 08 完掘状況 (東から)

- 図版IX (上) S F 09 完掘状況 (北から)
(中) S P 197 土器出土状況 (南から)
(下) S P 244 礫出土状況 (北から)
- 図版X (左上) S D 01 完掘状況 (南から)
(右上) S D 02 完掘状況 (南から)
(中) S D 03 完掘状況 (北東から)
(下) S D 03 完掘状況 (南東から)
- 図版XI (上) S D 03 土層確認状況 (1)
(中) S D 03 土層確認状況 (2)
(下) S D 06 土層確認状況
- 図版XII 出土遺物 (1) (今坂遺跡出土遺物、1～16)
- 図版XIII 出土遺物 (2) (17～49)
- 図版XIV 出土遺物 (3) (33・40・47、50～85)



遺跡地名

- | | | | | |
|------------|-----------|------------|--------------|------------|
| 1. 高田上ノ段遺跡 | 9. 中山 | 17. 瀬戸山II | 25. 石原沢 | 33. 二反田 |
| 2. 八海山 | 10. 城ノ腰 | 18. 瀬戸山I | 26. 東山 | 34. 吉岡大塚古墳 |
| 3. 又太郎 | 11. 東原 | 19. 瀬戸山III | 27. 金鑄原(久能山) | 35. 春林院古墳 |
| 4. 安里山 | 12. 溝ノ口 | 20. 花ノ腰 | 28. 陣屋北 | 36. 行人塚古墳 |
| 5. 長福寺 | 13. 今坂 | 21. 高田 | 29. 岡津原I | 37. ひさご塚古墳 |
| 6. 古城 | 14. 中原 | 22. 女高 | 30. 岡津原II | 38. 各和金塚古墳 |
| 7. 殿ノ台 | 15. 吉岡下ノ段 | 23. 平田ヶ谷 | 31. 岡津原IV | |
| 8. 後藤ヶ谷 | 16. 吉岡原 | 24. 境前 | 32. 岡津原III | |

第1図 高田上ノ段遺跡の位置と周辺遺跡

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経過と調査の目的

東海道本線掛川駅から二俣線に乗り換え、15分程行ったところに細谷駅がある。この細谷駅のホームに下り立つと西側前面に広く水田が開け、その向うに夕陽を背にした小高い丘陵が目にとまる。ここがこれから紹介する高田上ノ段遺跡のある和田岡原（高田・吉岡原）である。

この和田岡原には、古くは縄文時代早期から弥生時代、古墳時代に至る数多くの遺跡が所在している。中でも古墳時代中期和田岡古墳群（吉岡大塚古墳¹・春林院古墳²・行人塚古墳³・瓢塚古墳⁴・各和金塚古墳⁵）の存在は有名である。和田岡原の台地の上に立ち周囲を眺めると、狩猟・採集に適した森・林があり、耕作に適した大地・谷・平野が広がり、水利の可能な谷・川がある。また、大地に温もりを与える太陽がさんさんと照りつけており、この和田岡原が古くから動植物の棲息、人間の生活に適した土地であったことがうなずける。

掛川市教育委員会では、国および静岡県補助金を得て昭和56年度から昭和58年度にかけて市内遺跡分布調査事業を行い⁶、市内に所在する遺跡の確認とそのあり方について検討を加えた⁷。その中でこの和田岡原に分布する遺跡についても検討されたが、ここで扱われた資料は主に表採資料である為に遺跡の具体的な性格、有機的な関連について述べられたものとなっていない。

現在、和田岡原では多くの農家の人々によって茶園が経営されており、ここで生産される茶は日本一の茶生産量を誇る掛川市の一役を担っている。いつの時代、何事にも変革はつきもので、この茶栽培においても近年品種改良の為に植換えが行われている。この茶の植換えでは、水はけを考慮した地表土と地山土との転換いわゆる“天地返し”を伴うことが多く、同時に大地に刻まれた遺跡も消滅することが多い。

今回の高田上ノ段遺跡の発掘調査もこの茶の植換えによる遺跡消滅に端を発した発掘調査で、遺跡の記録保存を目的として国および静岡県補助金を得て行われたものである。

《参考文献》

- (1) 植松章八・岩井克允『吉岡大塚古墳 測量調査報告書』掛川市教育委員会（1980）
- (2) 内藤晃 編『春林院古墳』春林院古墳調査委員会（1966）
- (3) 松本一男『行人塚遺跡発掘調査概報』掛川市教育委員会（1983）
松本一男『女高遺跡発掘調査概報』掛川市教育委員会（1985）
- (4) 平野吾郎・植松章八・岩井克允『瓢塚古墳 測量調査報告書』掛川市教育委員会（1979）
- (5) 植松章八・平野吾郎・岩井克允他『各和金塚古墳 測量調査報告書』掛川市教育委員会（1981）
- (6) 『掛川市遺跡地名表』掛川市教育委員会（1982）
『掛川市遺跡地図』掛川市教育委員会（1983）
- (7) 瀬川裕市郎他『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』掛川市教育委員会（1984）

2. 調査の方法と経過

今回実施した発掘調査地点は吉岡大塚古墳の直ぐ南農道を隔てた所で、発掘調査実施面積はおよそ1,750㎡である。

調査でのグリッド設定は、周辺で行った発掘調査（中原遺跡：1981・1983）に従い設定する予定であったが、現地での杭の消失により任意に設定を行った（第5図参照）。今回の調査では、調査区の北東端農道に接した地境杭を基点とし、調査区北西端の農道に接した地境杭を結んだ線を調査の基本線とした。調査区にめぐらした網目は一辺5m四方で、基点を（A、1）とし西側5m毎にB・C・D……K、南側5m毎に2・3……10と呼称するようにした。小区画名称は、その北東角に位置する杭名称をそのまま与えるようにし、杭（B、2）の南西に位置する小区画は（B-2）グリッドとした。尚、設定した南北方向の区画線（グリッドライン）は、N-12°00'-Eである。

したがって、調査時の遺物取り上げは、遺構外出土遺物については上記の小区画に従って行い、遺構内出土遺物については遺構毎にドット化して行った。

現地での図面は、小区画にあわせ20分の1縮尺を基本とし、必要に応じて10分の1縮尺の図面を作成した。尚、記録写真はブローニーサイズ（6×7）原画白黒、35mmサイズ原画白黒・カラーリバーサルで撮影した。

発掘調査では、全面調査に先立ち試掘坑（2m四方の正方形）を調査区内の16ヶ所に穿ち、遺物包含層残存状況を確認することから始まった。この結果に基づき重機を導入し耕作土の掘削を行った。掘削は、調査区内の排土置きの関係から、調査区を北側と南側に2分割し調査前半分、調査後半分と2時期に分けて行っている。以下日程を追って発掘調査の経過を列記する。

昭和60年7月29日～31日 抜根茶樹の焼却および試掘

8月1日 発掘器材の搬入

（調査前半分：北側区）

8月2日～8月20日 重機稼動による耕作土の掘削。調査区基本杭の設定と小区画の設定、人工による荒削りと包含層遺物の取り上げ。

8月21日～8月26日 精査と遺構確認。SF 01～07、SD 01～03（03についてはその一部）、SP 01～244、SX 01～17等を確認する。

8月27日～9月5日 遺構の掘削と精査、写真撮影・図面作成を行う。

9月6日 調査前半分の完掘写真撮影。

9月9日～9月19日 調査前半分の遺構全体図（レベル付）の作成。調査前半分を終了する。

（調査後半分：南側区）

9月18日～9月27日 重機稼動による調査前半分の埋戻しと調査後半分の耕作土の掘削。人工による荒削りと包含層遺物の取り上げ。

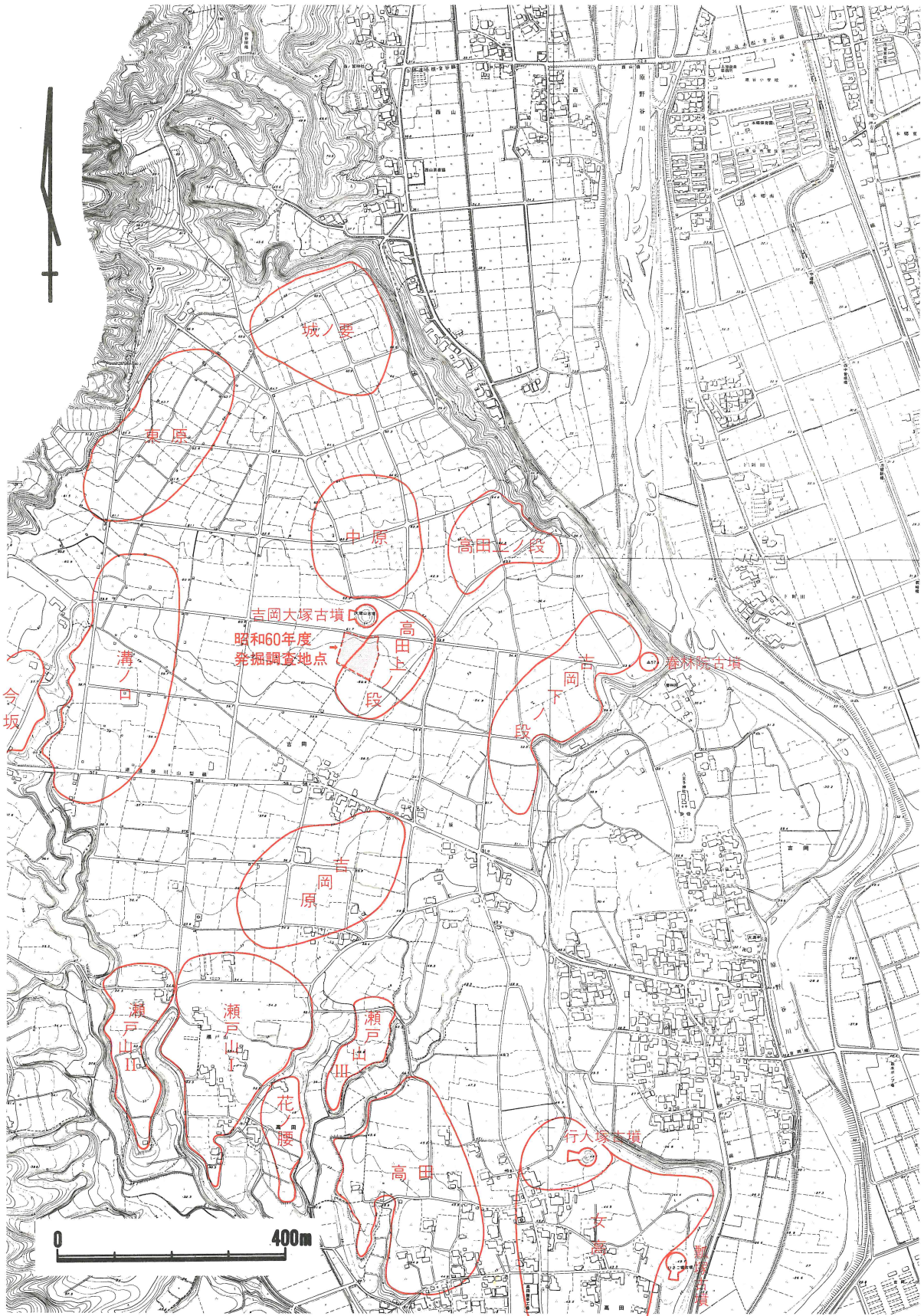
9月30日～10月9日 精査と遺構確認。SB 01、SF 08～09、SD 03～06、SP 301～514、SX 18～30等を確認する。

10月14日～11月14日 遺構の掘削と精査、写真撮影・図面作成を行う。

11月15日 調査後半分の完掘写真撮影。

11月16日～11月22日 調査後半分の遺構全体図（レベル付）の作成。調査後半分を終了し、今回の現地調査をすべて終了する。

11月25・26日 発掘器材の整理・撤去。



第2図 周辺地形と遺跡分布

3. 遺跡をめぐる環境

地理的環境 掛川市街地から車で10分程西に向って走ると袋井市との市境に行きあたる。この市境に沿って原野谷川が流れている。この原野谷川は掛川市の北部八高山赤メゾレ山に端を発して南下し、曾我地区徳泉で逆川と合流、袋井市を東から西に向けて流れ太田川に合流する。原野谷川流域には、上流・中流域に大小さまざまな河岸段丘が形成されている。今回紹介する高田上ノ段が立地する吉岡原（和田岡原の一部）も原野谷川が形成した河岸段丘の一つである。掛川市では縄文時代～古墳時代前期の遺跡の多くが河岸段丘上に立地しており、この原野谷川流域においても数多くの遺跡が発見されている（また、河岸段丘上には古墳時代中・後期の古墳群も立地していることを付け加えておく）。

原野谷川中流域に形成された和田岡原に焦点を絞ると、和田岡原が大きく2段丘面をもっていることがわかる。標高60m前後の上の段と標高40～50m代の下の段である。高田上ノ段が立地する段丘面は上の段で通称吉岡原と呼ばれており、下の段は通称高田原と呼ばれている。これら段丘は、地質図では段丘堆積層（白黄褐色の礫層）として紹介されており¹⁾、実際に現地を確認すると地表より1m程でこの段丘堆積層に当る。

この吉岡原・高田原には中小の谷が数多く刻み込まれており、今では確認できない小谷が段丘面のかなり内側にまで入り込んでいたと思われるふしもある。

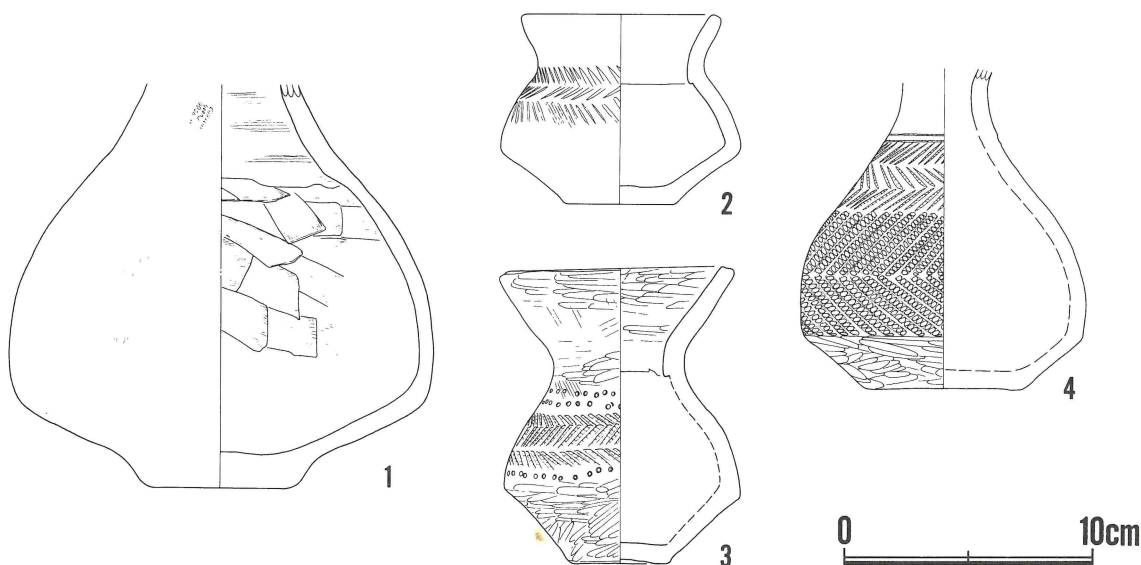
《参考文献》

若森英雄他『掛川市誌』掛川市・掛川市誌編纂委員会（1968）

(1) 『ふるさと発見第3集 掛川の植物』掛川市教育委員会（1981）

『掛川地方地質図』地質調査所（1963）

歴史的環境 先述したとおり原野谷川流域には河岸段丘を利用した遺跡が数多くある。ここでは、



第3図 今坂遺跡の出土遺物

弥生時代の遺跡に中心を置き、原野谷川中流域の遺跡分布について概観してみたい(第1図・第2図参照)。

原野谷川中流域掛川市原谷地区から曾我地区にかけての範囲で、弥生時代の遺物を出す遺跡は第1図に示した以外に幡鎌峰山、山下、浅間裏(袋井市)、宇佐八幡内(袋井市)、国本(袋井市)、原川、梅橋北が掲げられる。採集遺物から各遺跡の継続期間を見ると次のように整理される¹⁾

縄文時代晩期末に成立し古墳時代前期まで継続する遺跡……瀬戸山Ⅱ、岡津原Ⅰ、岡津原Ⅲ

縄文時代晩期末に成立し古墳時代中期以降まで継続する遺跡……吉岡下ノ段

弥生時代中期に成立し弥生時代中期で終結する遺跡……二反田、原川²⁾

弥生時代中期に成立し弥生時代後期まで継続する遺跡……八海山、又太郎、長福寺西、金鑄原(久野山)、山下³⁾、梅橋北⁴⁾

弥生時代中期に成立し古墳時代前期まで継続する遺跡……女高⁵⁾、東山、陣屋北

弥生時代後期に成立し弥生時代後期で終結する遺跡……安里山、古城、中原、高田上ノ段、殿ノ台、石原沢、浅間裏、宇佐八幡内、国本、岡津原Ⅱ

弥生時代後期に成立し古墳時代前期まで継続する遺跡……幡鎌峰山、中山、東原、溝ノ口、吉岡原、瀬戸山Ⅰ、瀬戸山Ⅲ、花ノ腰、平田ケ谷、岡津原Ⅳ

弥生時代後期に成立し古墳時代中期以降まで継続する遺跡……後藤ケ谷、城ノ腰、高田

これらを第1図・第2図とあわせてみると次のことが言えるのではないだろうか。

1. 該期に属する遺跡の多くは、台地上に立地する(ただし、原川、梅橋北、国本のように沖積平野の自然堤防上に立地する遺跡が存在することから、今後特に中期の遺物を出す遺跡が発見される可能性があると思われる)。
2. 弥生時代後期になると遺跡の数が急増するが、これは農業技術の進歩等により新田開発が盛んに行われた結果ではないか。
3. 縄文時代晩期から古墳時代前期・中期以降にまで継続する遺跡が見られるが、これらの遺跡を出自の系譜として本家と新家関係の発生の結果、弥生時代後期において遺跡の増加が見られるのではないか。

こうした周辺環境の中で高田上ノ段遺跡は短期間であるが弥生時代後期に集落を営んだものと思われる。

次に古墳の分布状況であるが、5世紀代の古墳としては和田岡古墳群⁵⁾に属する吉岡大塚古墳・春林院古墳・行人塚古墳・瓢塚古墳・各和金塚古墳、岡津原に目を転ずれば岡津奥ノ原古墳が確認されている。6世紀に入ると和田岡原に占地する小円墳群、岡津原に西岡津古墳⁶⁾、向山1・2号墳⁷⁾、奥津向原古墳、6世紀中頃になると和田岡原の対岸本郷に宮坂⁸⁾、長福寺下、古戦、楠ケ谷の各横穴群の造墓開始が見られる。

《参考文献》

- (1) 佐藤由起男「弥生時代の遺跡の概要」『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』掛川市教育委員会(1984)
- (2) 梶田博之・羽二生保『原川遺跡 昭和59年度発掘調査概報』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所(1985)
- (3) 前田庄一・松本一男『山下遺跡』袋井市教育委員会・掛川市教育委員会(1984)
- (4) 松本一男『梅橋北遺跡発掘調査報告書』掛川市教育委員会(1985)
- (5) I-1の参考文献(1)~(5)と同じ
- (6) 嶋竹秋「掛川市西岡津古墳発掘調査報告」『東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県教育委員会(1968)
- (7) 大谷純二「掛川市向山古墳(第1号・第2号)発掘調査概報」『同上』静岡県教育委員会(1968)
- (8) 吉岡伸夫・渡辺康弘「古墳時代」『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』掛川市教育委員会(1984)

II 調査の内容

今回の発掘調査で確認し得た遺構（第5図参照）は、竪穴式住居跡（SB）1、土坑（SF）7、小穴（SP）458、溝状遺構（SD）6、その他時代・意味不明遺構（SX）30である。遺構内ならびに調査区域内からの出土遺物を概観すると、SD 03を除いておおむね弥生時代後期に比定されるものと思われる。SD 03は、形状・出土遺物から6世紀前半代の小円墳であることが推測される。また時代・意味不明遺構（SX）については、SX 17（調査時にはSF 06として扱い調査）を調査した結果、覆土が不安定であること、平・立面形状が不安定であること等から時代・意味不明遺構として取り扱った。またこのSXについては、今回の調査地点の北西位に位置する中原遺跡においても検出・確認している¹⁾。

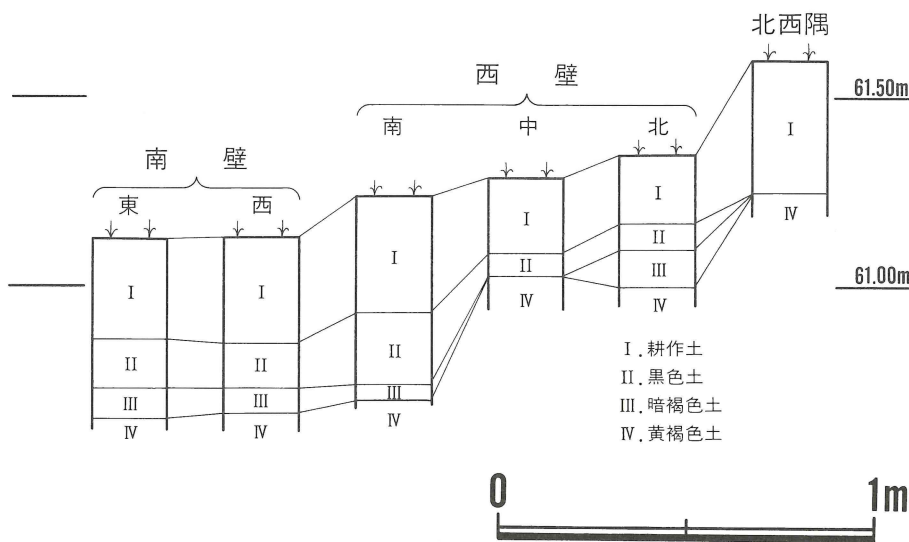
調査区内に10cm毎の等高線を描いてみる（第5図参照）と北寄に高く（61.10m以上）、南・東に向かって低くなっている（60.50m以下）ことがわかる。ところでこの等高線の配列状況と直接関係ない（広く遺跡全体について等高線を描いたものでない）が、SD 03とSX 01～30を遺構全体図の中から除去して遺構配置を眺めてみると、高田上ノ段遺跡の広がりがある今回の調査地点の東から南東方向にあると想像される。これは、調査区南東位に竪穴式住居が検出していること、多数の小穴を観察すると柱穴状（径と深さから判断すると住居跡）のものが数多く確認できていること等から想像することができる。

尚、第4図に示したとおり調査区域内の土層は比較的保存状態が良く、和田岡原の基本層序に準じた結果を得ている。つまり上から、I層（表土・耕作土）、II層（黒色土）、III層（暗褐色土）、IV層（黄褐色土）、V層（黄褐色礫層）の順に構成されている。

《参考文献》

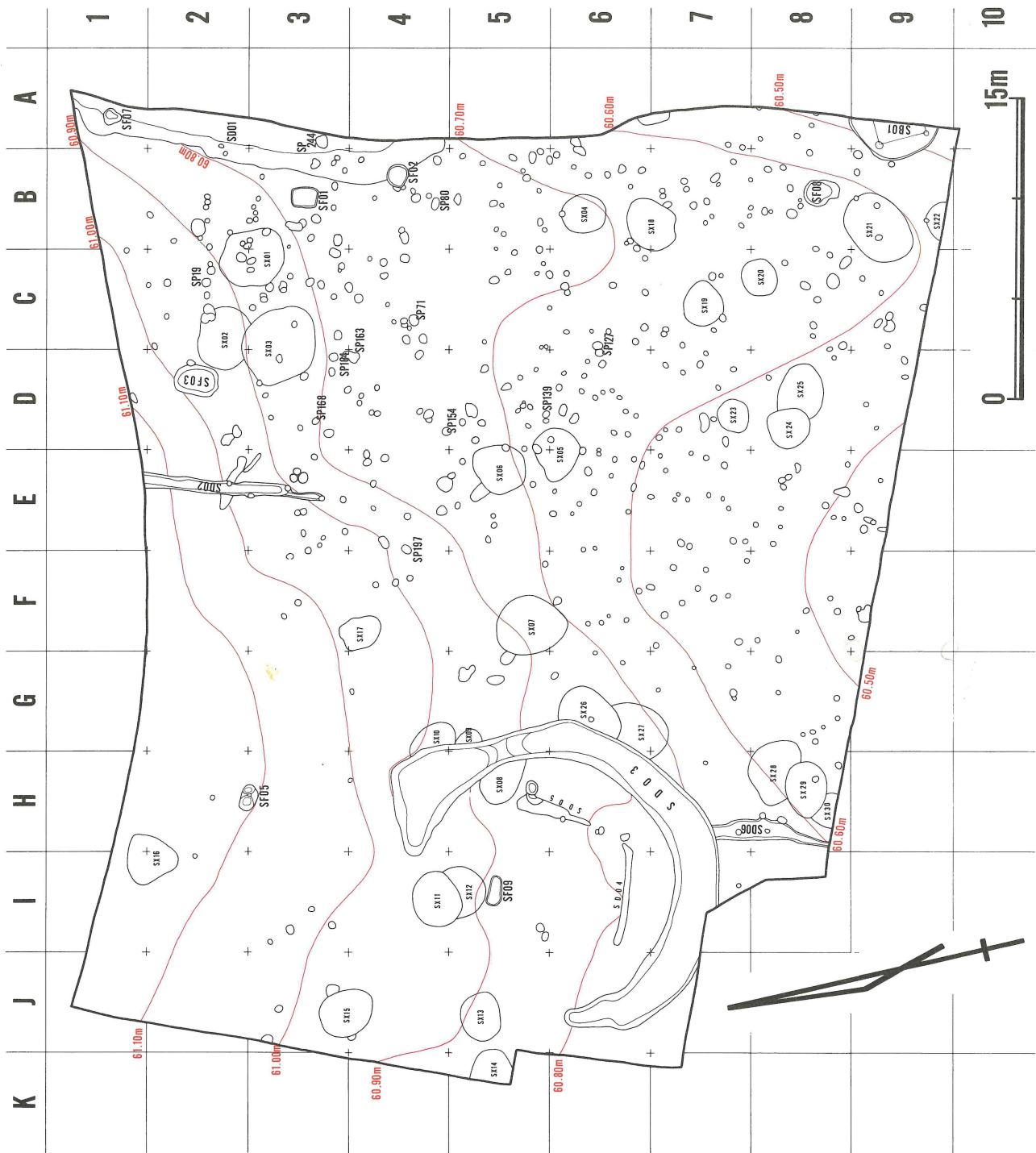
(1) 松本一男『中原遺跡発掘調査報告書』掛川市教育委員会（1984）

1. 遺 構



第4図 調査区の土層柱状図

今回確認した遺構は前述のとおり、弥生時代後期の竪穴住居跡（SB）1、土坑（SF）7、小穴（SP）458、溝状遺構5、古墳時代の古墳周溝（SD 03）1、時代・意味不明遺構（SX）30、である。以下、遺構別に説明していく。



第5図 遺構全体図

i 竪穴式住居跡 (S B) (第6図)

S B 01 調査区の南東隅 A-9 Grid において検出。壁の立ち上り方が明瞭でなく床面直上でかろうじて確認した。住居跡の規模は、未確認部分が半分あるので長径・短径は不明である。確認面から床面までの深さ 5 cm 未満。確認した柱穴間の距離は長軸方向で 245 cm、短軸方向で 224 cm (柱穴と炉の位置から推定) である。住居跡の長軸方向は、N-3°-W である。壁面の状況は、確認深度が浅く不明である。床面の状態は、第6図住居跡断面図にも示してあるが、全面に厚さ 10 cm 程の貼床 (ロームブロックを含み堅くしまりのある状況) が施されていた。床面はほぼ平坦面を成すものである。柱穴は貼床状態で 2ヶ所確認できており、それらの規模は北側のものが径 45 cm × 23 cm ・床面からの深さ 22 cm、南側のものが径 24 cm × 23 cm ・床面からの深さ 25 cm を測っている。薄く確認できた住居跡に伴う覆土は、黒色土でローム粒を含有する比較的しまりのある土であった。

炉は、住居跡中央のやや北寄りに貼床面を窮つ形で作られていた。炉は確認し得たのが全体の半分である為規模・平立面形状が定かでないが、推定で長径 48 cm ・短径 40 cm ・床面からの深さ 5 ~ 8 cm を測り、平面楕円形 (あるいは不整形) の浅い皿状を呈するものと思われる。炉覆土 (第6図炉土層断面参照) は、下部に赤褐色の焼きしまった焼土(3)、上部に焼土粒・炭化粒が多量に含まれた黒色土が覆っていた。

住居跡 S B 01 の構築時期は、出土遺物が床直上からの壺小破片 1 片のみであるので確定し難いが、周辺からの出土遺物を考え合わせて弥生時代後期と考えている。

ii 土 坑 (S F) (第7図~第13図)

現地での調査では、S F 01 ~ 09 の 9 基のものを土坑として扱い調査したがその後の検討で S F 04 ・ 06 が意味不明遺構 S X として扱うこととなった。つまり本報では S F 04 を S X 17、S F 06 が S D 01 構内に含まれている。したがって本項では S F 01 ~ 03、05、07 ~ 09 のみを図と共に説明する。

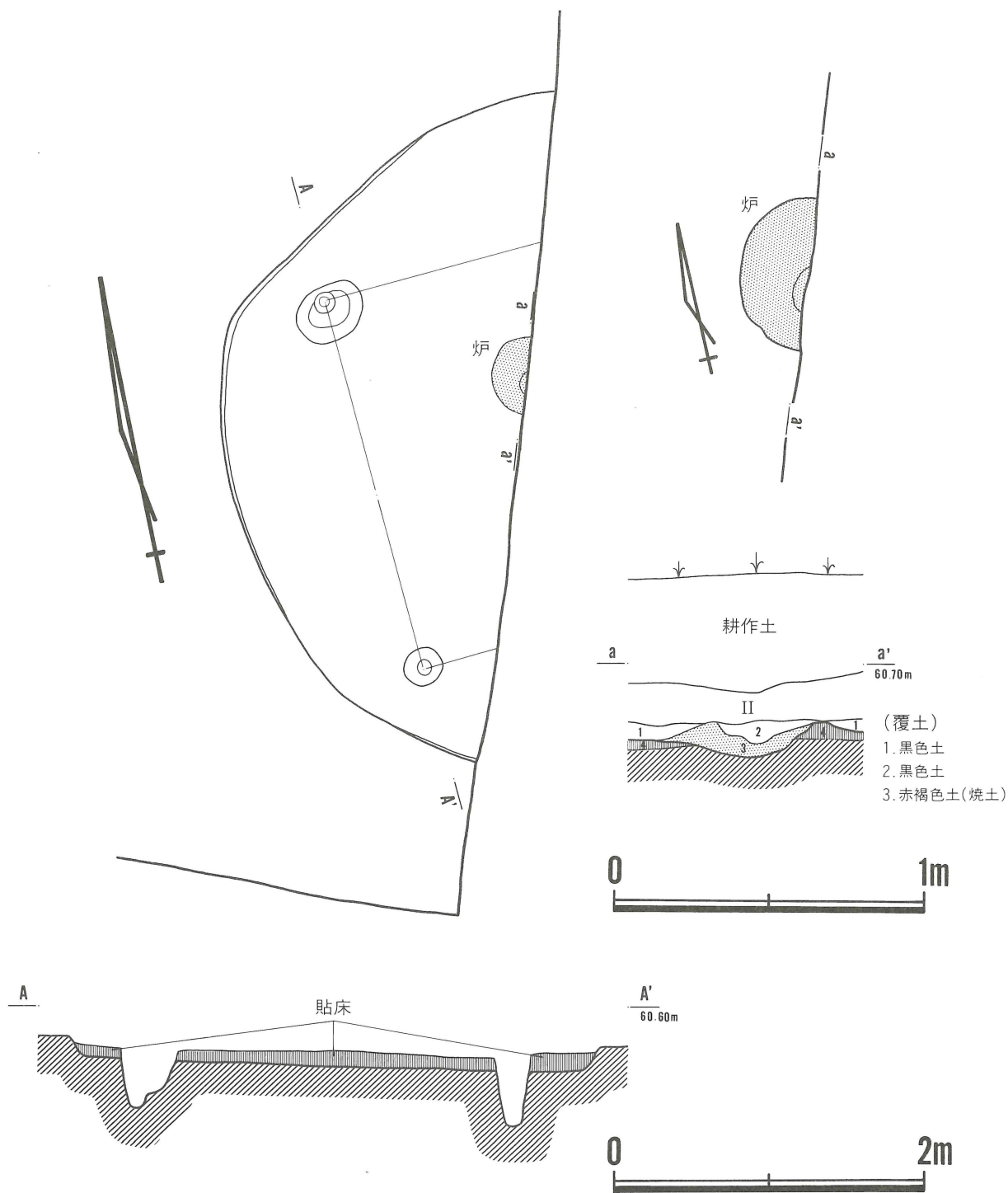
S F 01 検出位置は B-3 Grid で S D 01 の西隣りに位置する。土坑の規模は長径 133 cm ・短径 102 cm ・確認面から床面までの深さ 10 cm 程度を測る。平面形状は長方形で、長軸方向は N-12°-E である。遺構の掘り方は、床面はほぼ平坦面を形成しているが中央付近でやや深く確認面から 13 cm 程になる。壁は床面より急に立ち上っている。

坑内覆土は、黒色土 2 層が確認されており上層にはローム粒・炭化粒が含まれしまりのゆるい土が、下層はロームブロックを若干含むややしまりのある土であった。坑内からの出土遺物は第21図2の近世かわらけが確認面上から出土した他は小破片の弥生時代後期に比定される土器片である。

S F 02 検出位置は B-4 Grid で S D 01 の南西位に切り合って検出している。S D 01 との新旧関係は黒色土同士で明確となっていない。また出土遺物からも明確となっていない。土坑の規模は長径 115 cm ・短径 108 cm ・確認面から床面までの深さ 18 cm を測る。平面形状は、土坑西側部で小穴と接しているがほぼ円形である。長軸方向は定かでないがあえて設定すると N-5°-E を測る。遺構の掘り方は、中央部がやや低くなるものの床面全体としてはほぼ平坦で、壁は床面より急に立ち上る状況を示す。

坑内覆土は、黒色土でしまりのゆるい土である。出土遺物は弥生時代後期に属すると思われる土器小破片が数片のみである。

S F 03 検出位置は D-2 Grid で、調査区の北側、S D 02 の東側に位置する。土坑の規模は長径 226 cm ・短径 152 cm ・確認面から床面までの深さ 30 ~ 35 cm を測る。平面形状は長楕円形を呈している。長軸方向は N-20°-E を測る。遺構の掘り方は、南寄りにやや深くなるものの平坦面

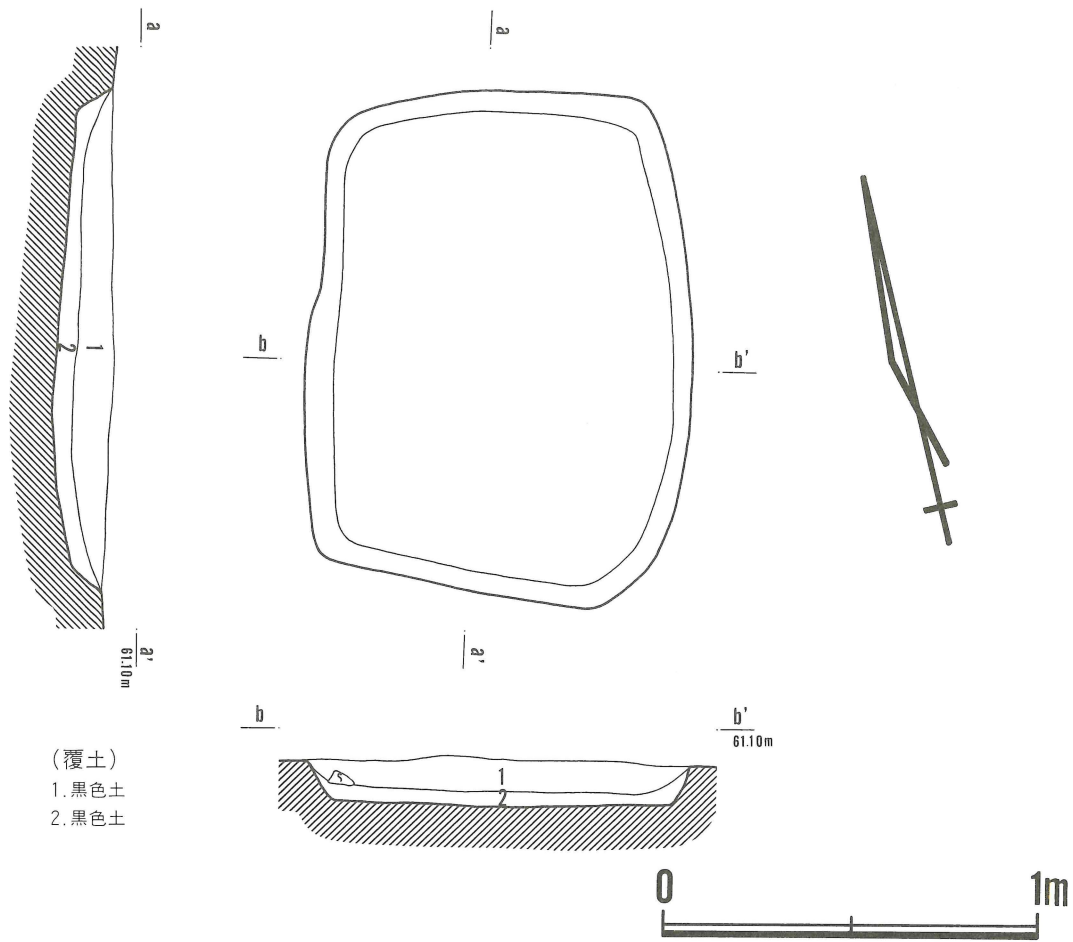


第6図 SB 01 実測図

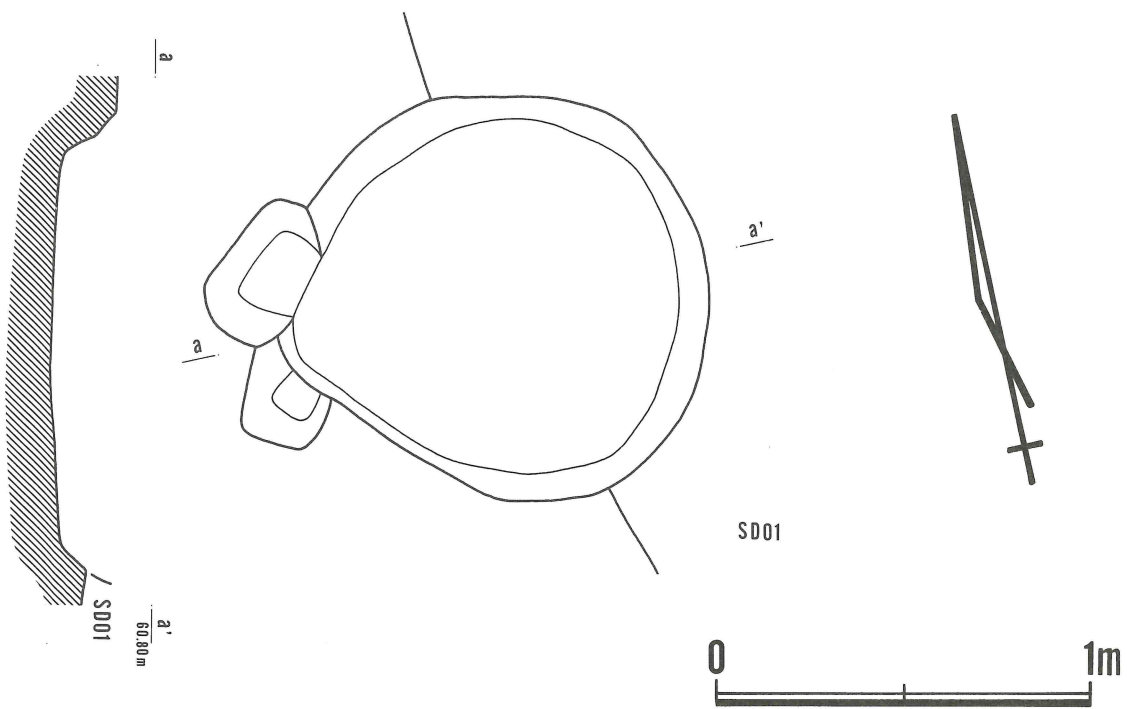
を成しており、壁は床面より急傾斜をもって立ち上る。

坑内の覆土は4分層され、上層から1 黒色土（ローム粒・炭化粒を含みしまりのない土）、2 黒褐色土（ロームブロック・炭化粒を含むしまりのない土）、3 黒色土（炭化粒を含むしまりのある土）、4 黒褐色土（ロームブロックを含みしまりのある土）で構成されており、ほぼレンズ状堆積を成す。

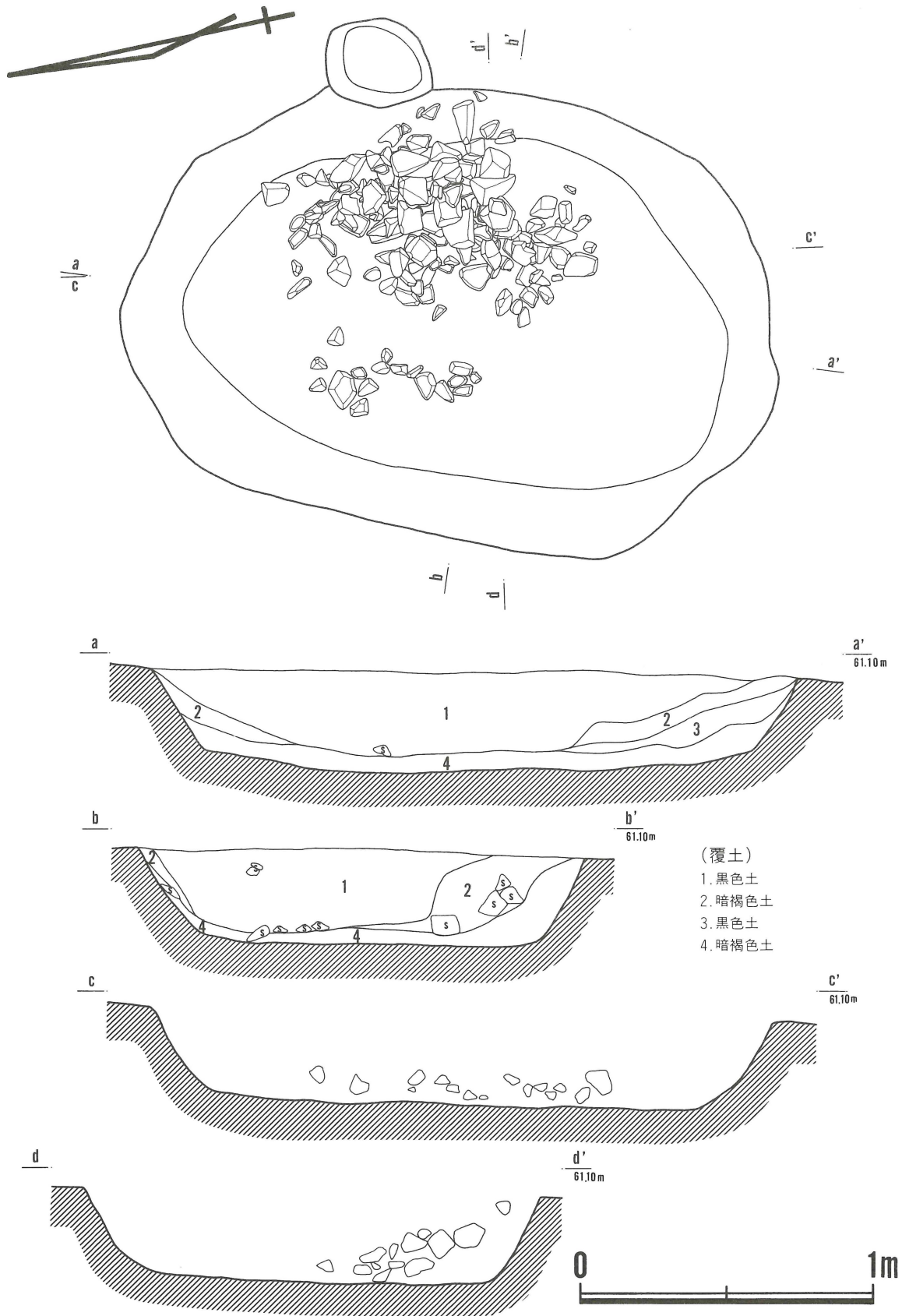
坑内からの出土遺物は合計 189 個を数える10~15cm程の自然礫を中心に弥生時代後期に属する土器



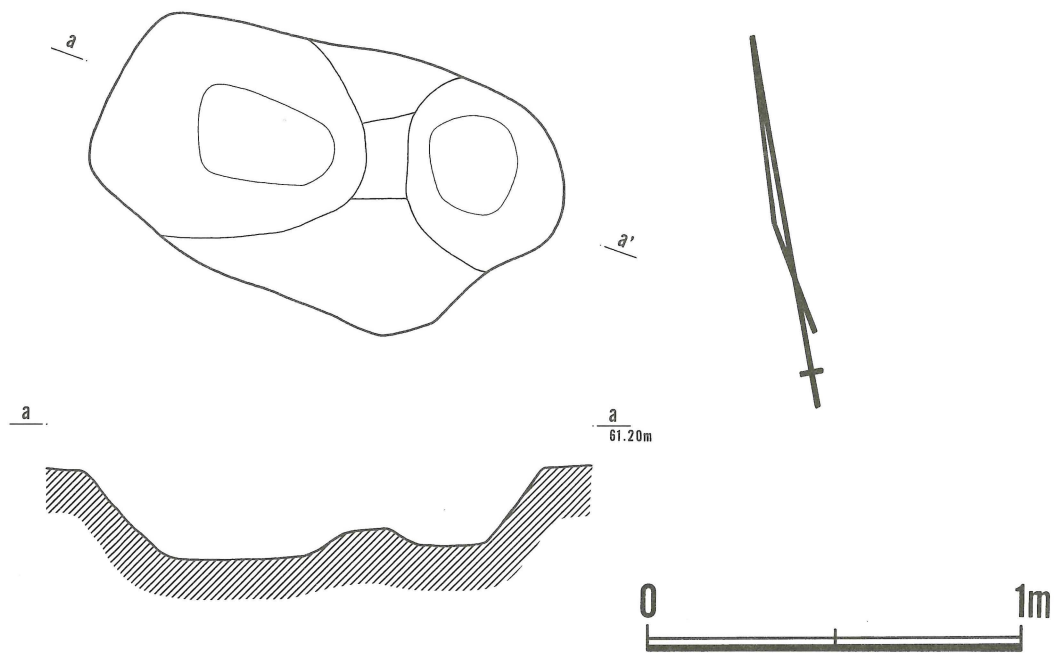
第7图 SF 01 实测图



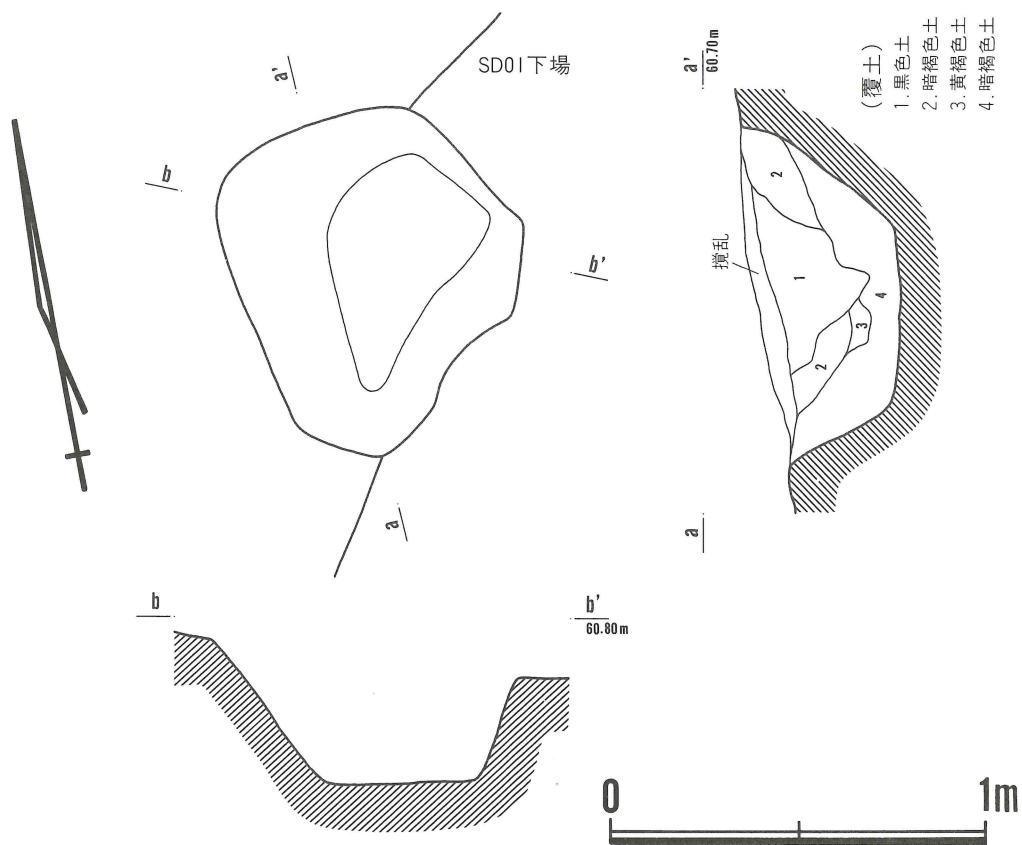
第8图 SF 02 实测图



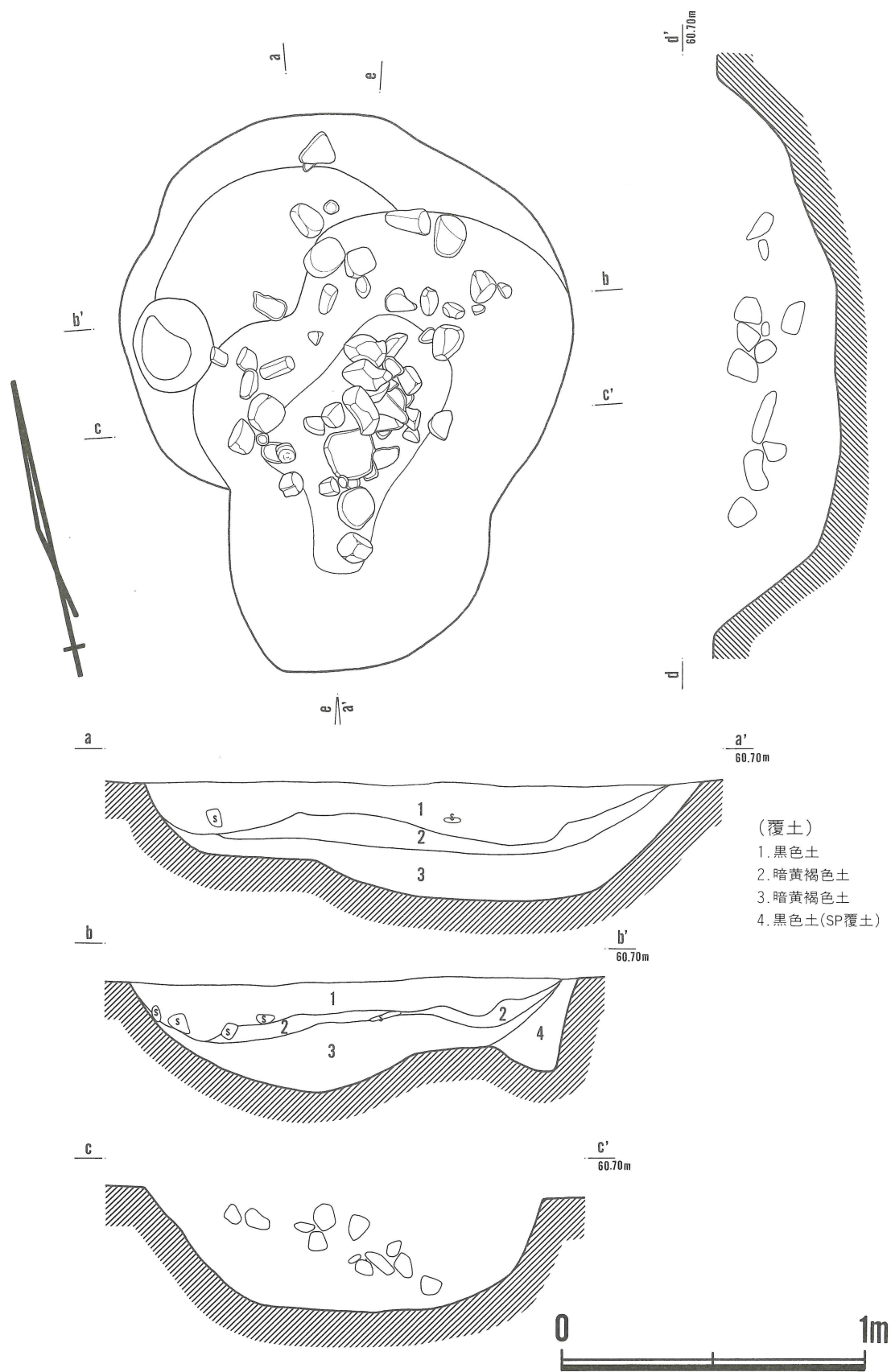
第9图 SF 03 实测图



第 10 图 SF 05 实测图



第 11 图 SF 07 实测图



第12图 SF 08 实测图

の小破片が1片出土したのみである。尚礫はすべて無焼成である。またこれら礫の出土状況は第9図に示されているように、平面的には土坑東寄りに集中が見られ、断面的には4層黒褐色土が第1次堆積後東側から流れ込むような形で出土している。

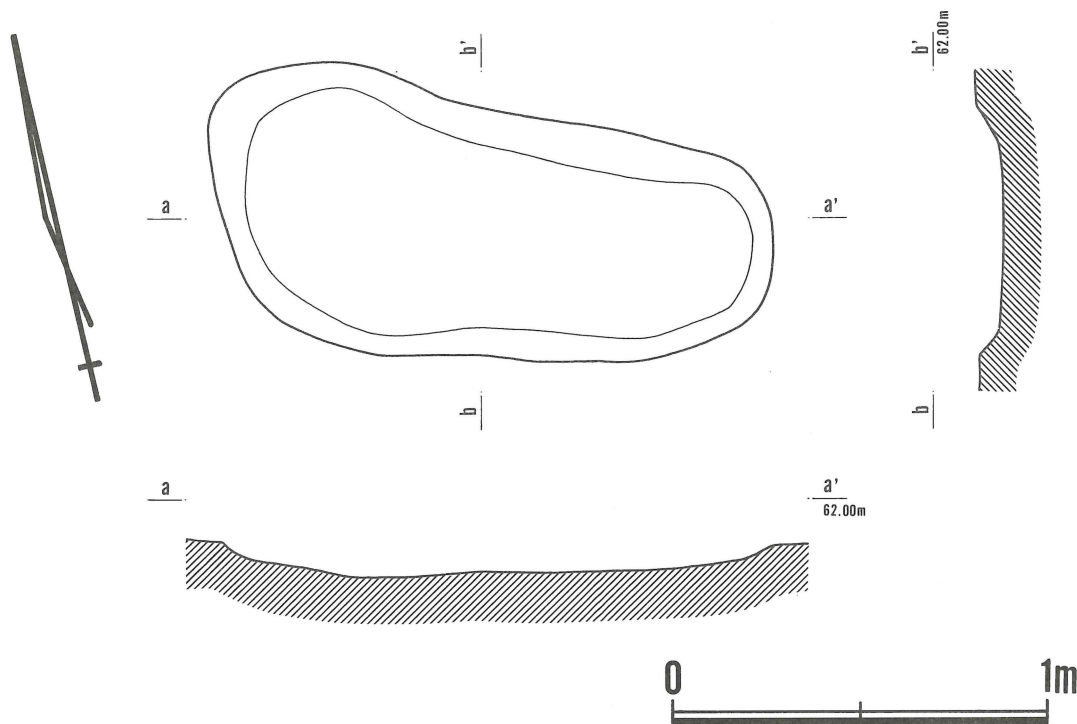
土坑構築時期は、出土土器があまりにも小破片すぎる為に積極的根拠とならないが弥生時代後期と考えている。

S F 05 検出位置は調査区の北西H-2~3 Gridにおいてである。確認プランにおいて不整長方形であった為土坑としてここでも扱っているが小穴の切り合ったものとしても扱えると考え。遺構全体の規模は長径123cm・短径71cm・確認面から床までの深さ23cmと25cmを測る。平面形状は不整楕円形を呈しており、長軸方向はN-58°-Wを測る。遺構の掘り方は、小穴が2基隣り合った形状で、床面はどちらも平坦面を成し壁は緩やかに立ち上る。

覆土は黒色土で覆れていたが、2基の小穴として確認できるような状況ではなかった。出土遺物は弥生時代後期に属される土器小破片1片のみであった。

S F 07 検出位置は調査区の北東隅A-1 GridでSD01の北域内に検出した。本坑の確認はSD01覆土掘削中に確認した為本坑とSD01との新旧関係はつかめていない。遺構の規模は長径89cm・短径77cm・確認面(SD01床面)から床面までの深さ41cmを測る。平面形状はSD01と切り合っていることを考慮してほぼ方形になると考えている。長軸方位はN-7°30'-Wを測る。遺構の掘り方は床面が南寄りにやや深くなるもののほぼ平坦面を成しており、壁は床面から急傾斜に直線的に立ち上っている。

坑内覆土は、上面にSD01の覆土(SF07にとっては攪乱となるか)の下に1黒色土(炭化粒を含むしまりのある土)、2暗褐色土(ローム粒を含みしまりのゆるい土)、3黄褐色土(ロームブロッ



第13図 SF 09 実測図

クを含みかたくしまりのある土)、4 暗褐色土 (砂まじりの土) である。尚本坑からの出土遺物は、土器小破片すらもなかった。

S F 08 検出位置は調査区の南東隅、S B 01 の北西側の B-8 Grid である。遺構の規模は長径 185 cm・短径 148 cm・確認面から床面までの深さ 37~41 cm を測る。平面形状は不整形で、長軸方向をあえて設定すると N-22°-E を測る。遺構の掘り方は床面が南寄りにやや深くなるがほぼ平坦面を形成しており、壁は床面より急傾斜をもって立ち上る。尚本坑北西側には床面より一段高くテラス状の平場がみられ平面的には他遺構とも考えられるが、土層観察する限りでは分層状況にあるとは言えず同一遺構として捉えている (第12図 S F 08 土層断面図参照)。

坑内の覆土は上面より3分層され、1 黒色土 (ローム粒が含まれしまりのない土)、2 暗黄褐色土 (ロームとの溶混がみられ全体的に黄色味を帯びる)、3 暗黄褐色土 (2層よりもロームとの溶混が激しく明るくなる。また2よりも土にしまりがある) となる。

坑内からの出土遺物は S F 03 と同じような 5~15 cm 程の自然礫が合計 78 個出土した。これらを構成する礫からは全く焼成痕は見られなかった。またこれら礫の出土状況は、3層暗黄褐色土が第1次堆積土として埋没した後あるいは最中に本坑西側より流れ込む形で出土している (第12図 S F 08 断面図参照)。尚時代のわかる遺物として第22図 14~16 の土器片があるが、これらはすべて礫に混在して出土している。この3点の土器破片を根拠に S F 08 の構築時期を弥生時代後期に設定したい。

S F 09 検出位置は I-5 Grid で S D 03 が囲む内側の平坦面に検出している。遺構の規模は長径 152 cm・短径 64 cm・確認面から床面までの深さ 6~9 cm を測る。平面形状は不整形であるがほぼ楕円形を呈するものである。遺構南壁面に合わせた長軸方向は N-68°-W である。遺構の掘り方は床面全体がほぼ平坦面を成すものの西側がやや深くなる。壁は確認状況が浅いので定かでないが確認し得る範囲では緩やかに立ち上っている。

坑内覆土は暗褐色土 1 層のみを確認している。坑内からの出土遺物は時代の判明できる土器小破片 1 片すらも出土しておらず、したがって本坑の構築時期は不明である。ただ、今回の調査では周辺から出土している土器がほとんど弥生時代後期に属されるものであることから、この時期に比定される可能性をもっている。

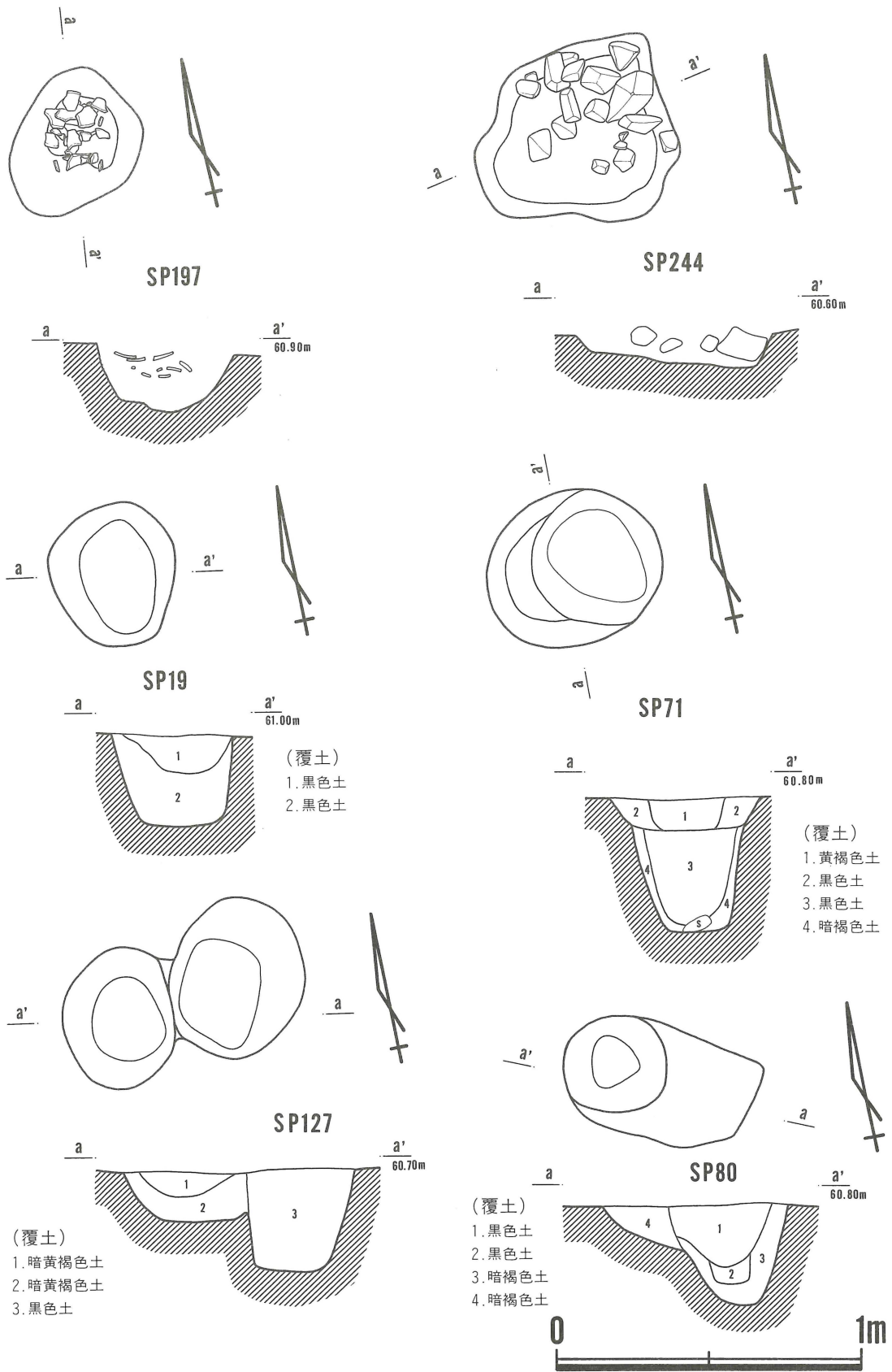
iii 小 穴 (S P) (第14~15図)

現地の調査では、小穴を全部で 458 基確認している。この中には第14~15図に示した小穴のように柱穴として充分堪え得る規模・形状・土層を示す小穴が相当数含まれている。同時にこの数字の中には確かな形状も成さない小穴も多数あったことを付け加えておく。柱穴として妥当な小穴は調査区の中程から東寄りに存在していたようで、一方今回の調査で唯一確認した住居跡もほとんど床面直上で確認したという状況を考え合わせるとこれら柱穴状小穴の中には住居跡を構成するものも含まれると考えられる。事実 4 本主柱を構える住居跡が想定できる組み合わせもあるにはあるが、住居跡として今回紹介するには根拠が薄いので差し控えた。

ところでこれら柱穴状小穴とは状況の異なる小穴が確認されているので次にそれらを紹介したい。

S P 197 検出位置は E~F-4 に検出。遺構の規模は長径 48 cm・短径 40 cm・確認面から底面までの深さ 21 cm を測る。平面の形状は不整楕円形を呈しており、立面の形状は深碗状を呈している。

小穴内の覆土は土器の出土した土層が炭化粒の多く含まれた黒色土、その下層にはしまりのある暗褐色土により構成されていた。



第14图 SP实测图(1)

小穴内からは第21図40に示した甕形土器が第14図 S P 197 の実測図のように横に押しつぶれた状況で出土している。尚復元した土器は甕形土器であるが台部が欠損した状態である。

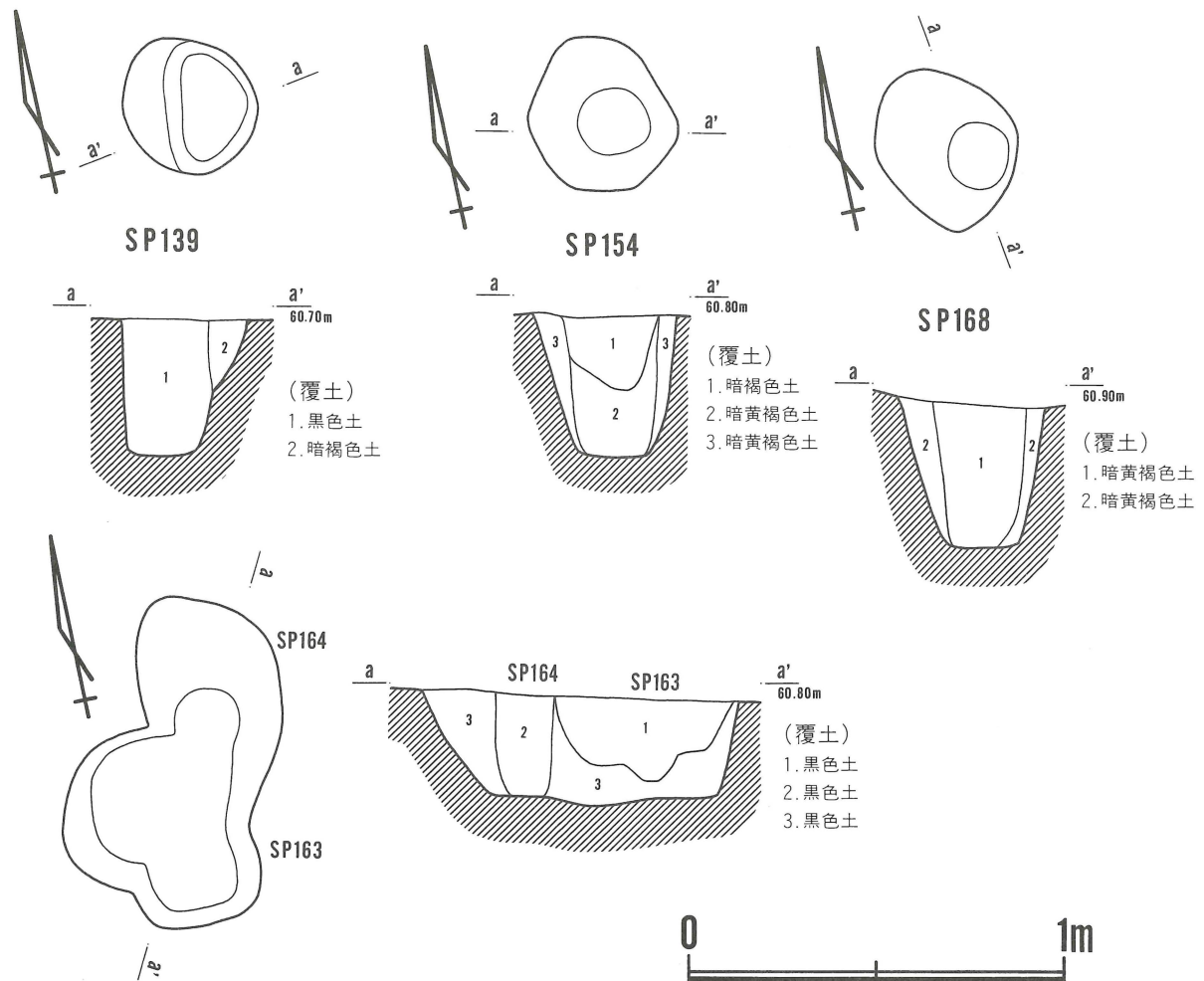
S P 244 検出位置は S D 01 内の A-3 Grid に検出。S D 01 掘削後 S D 01 底面に確認したものである為、S D 01 との新旧関係はつかめていない。遺構の規模は長径 65 cm ・短径 60 cm ・確認面から底までの深さ 11 cm を測る。掘り方は西よりも東寄りに深く掘られており、遺構立ち上りは底面から緩やかに立ち上っている。

小穴内覆土は黒色土であり S D 01 覆土の黒色土とは区別できていない。小穴内からは 10~15 cm 程度の自然礫を中心に 21 個の礫が出土している。

柱穴状小穴

S P 19 検出位置は C-2 Grid。小穴の規模は長径 47 cm ・短径 41 cm ・確認面から底面までの深さ 30 cm を測る。小穴内覆土は 2 分層でき、上層に 1 黒色土（しまりはゆるくボソボソとしている）、下層 2 黒色土（ローム粒・ロームブロックが多量に含まれている。しまりは 1 よりも堅くしまりのある土）である。

この S P 19 付近では、同じような柱穴状小穴 7 基が東西方向に一列に並ぶ状況を呈して検出している。



第 15 図 S P 実測図(2)

S P 71 検出位置はC-4 Grid。小穴の規模は長径59cm・短径50cm・確認面から底面までの深さ45cmを測る。小穴の平面形状は不整円形で、掘り方は西側部にテラス状の平坦面をもつ。

小穴内覆土は大きく上層・下層と2分層され、さらに上層は1黄褐色土（ロームブロックで堅くしまりのある土）と2黒色土（ローム粒含有。堅くしまりのある土）に分けられ、下も3黒色土（炭化粒を含みしまりのゆるい土）と4暗褐色土（ロームとの溶混がみられる。しまりのゆるい土）に分けられる。この小穴の遺構確認の際に、黒色土（2）の円形プランの中央に黄褐色土（1）の円形プランが確認されている。おそらくこの黄褐色土の円形の大きさが柱の規模を知る手懸かりになるものと思われる。

尚、このS P 71周辺からは住居跡あるいは掘立柱建物跡を想定できる小穴は確認できていない。

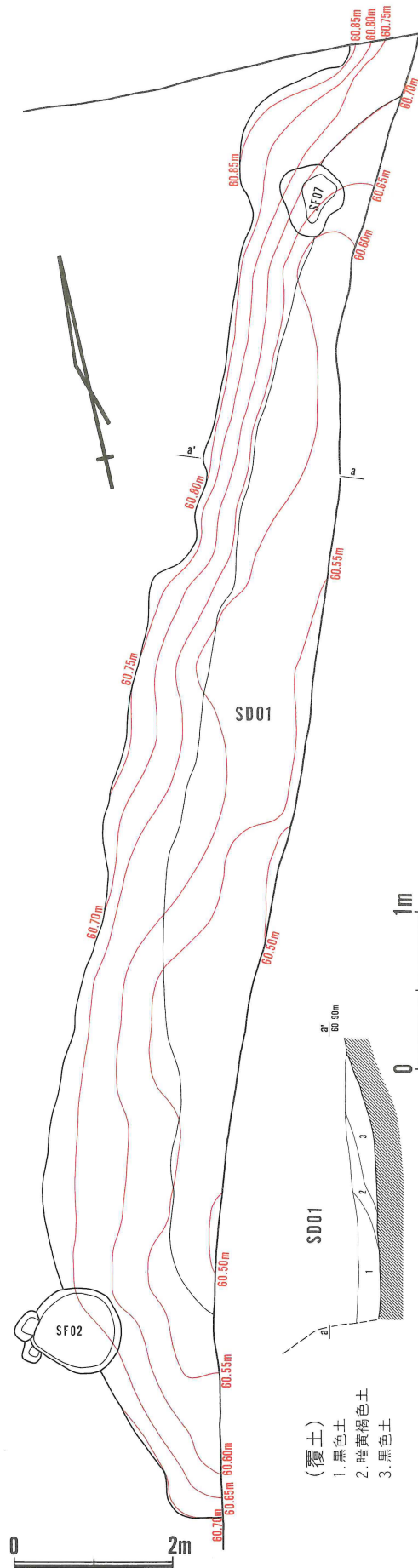
S P 80 検出位置はB-4 Gridである。小穴の規模は、S P 80がS P 79（柱穴状小穴でない単なる小穴）と切り合っている為不整となっているが、長・短径37~40cm、確認面から底面までの深さ35cmを測る。平面形状は円形と思われる。

小穴内覆土は3分層される。つまり1黒色土（炭化粒を含むしまりのある土）、2黒色土（炭化粒を含むが1よりもしまりはゆるい）、3暗褐色土（ロームとの溶混がみられ、しまりのある土）で構成される。土層確認状況では、1の黒色土が2と3を覆っている状況を示しており、2が柱痕状を示していた。

尚、このS P 80付近では住居跡あるいは掘立柱建物跡を想定できる柱穴状小穴は確認されていない。

S P 127 検出位置はC-6 Gridで隣接してS P 128がD-6 Gridに検出している。小穴の規模は長径52cm・短径43cm・確認面から底面までの深さ34cmを測る。平面の形状はほぼ円形を示す。

小穴内覆土は検討した限りでは単一層で黒色土



第16図 SD01実測図

(しまりのゆるい土)のみで覆われていた。

S P 127 付近からは多数の小穴を確認しているが、同規模で掘立柱建物跡を想定できるような位置に小穴は検出できなかった。

S P 139 検出位置はD-5 Grid の南域である。

小穴の規模は長径38cm・短径36cm・確認面から底面までの深さ37cmを測る。平面形状は円形であるが、立面形状では小穴西側上部で立ち上がり方が急から緩に変化する。

小穴内覆土は基本的には1黒色土(しまりのゆるい土)の単一層で構成されている。

S P 154 検出位置はD-4 Grid 南辺である。

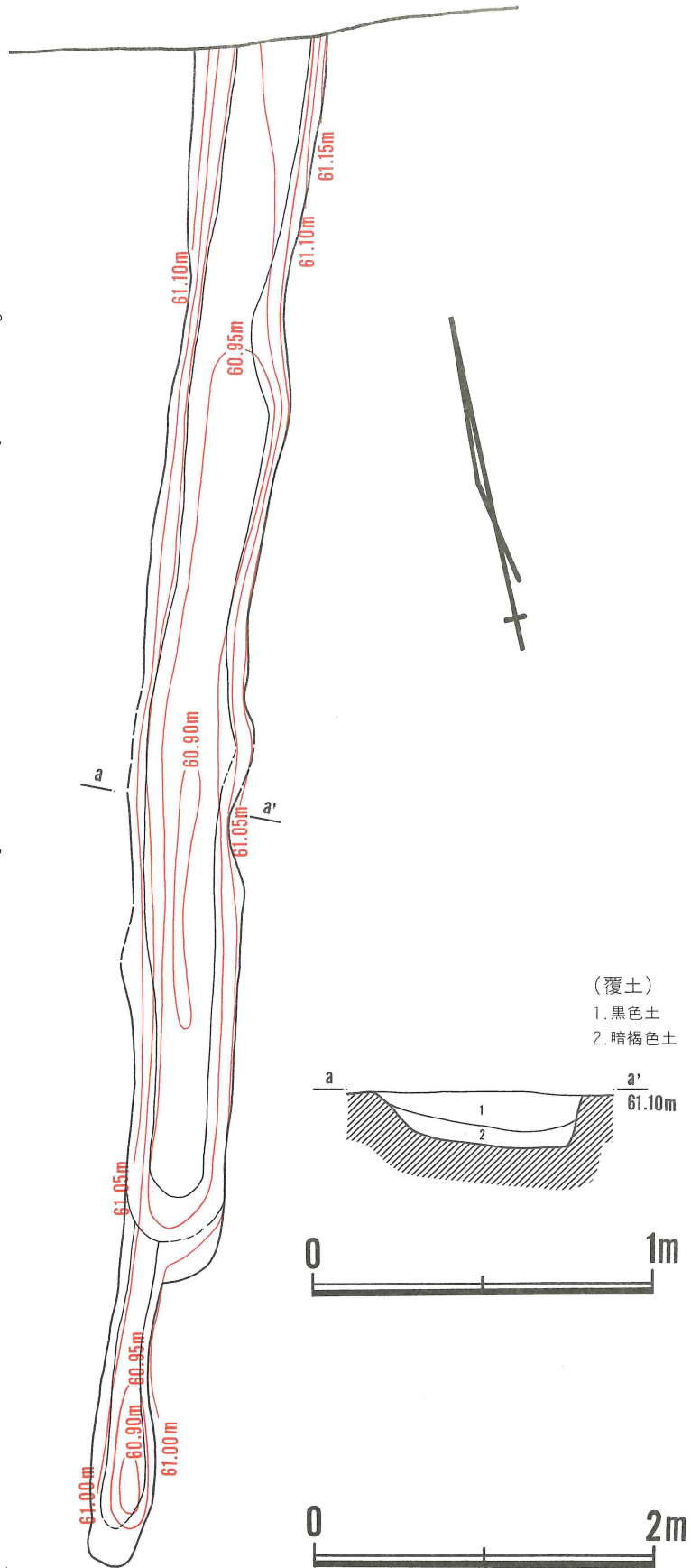
小穴の規模は長径41cm・短径40cm・確認面から底面までの深さ39cmを測る。平面形状は不整円形を示す。

小穴内覆土は3分層され小穴中央上部に1暗褐色土(炭化粒を含むしまりのある土)、下部に2暗黄褐色土(ロームとの溶混がみられしまりのゆるい土)、そしてこの2層を囲むように3暗黄褐色土(ロームとの溶混がみられ堅くしまりのある土)が確認された。

尚、このS P 154 付近でも建造物を思わせる他の小穴は確認できなかった。

S P 163・164 検出位置はD-3~4 Grid

でS P 163の北側にS P 164が切り合う状況で検出された。規模は不正確であるがS P 163が径43cm前後・確認面から底面までの深さ27cmを測り、S P 164が径34cm前後・確認面から底面までの深さ27



第17図 S D 02 実測図

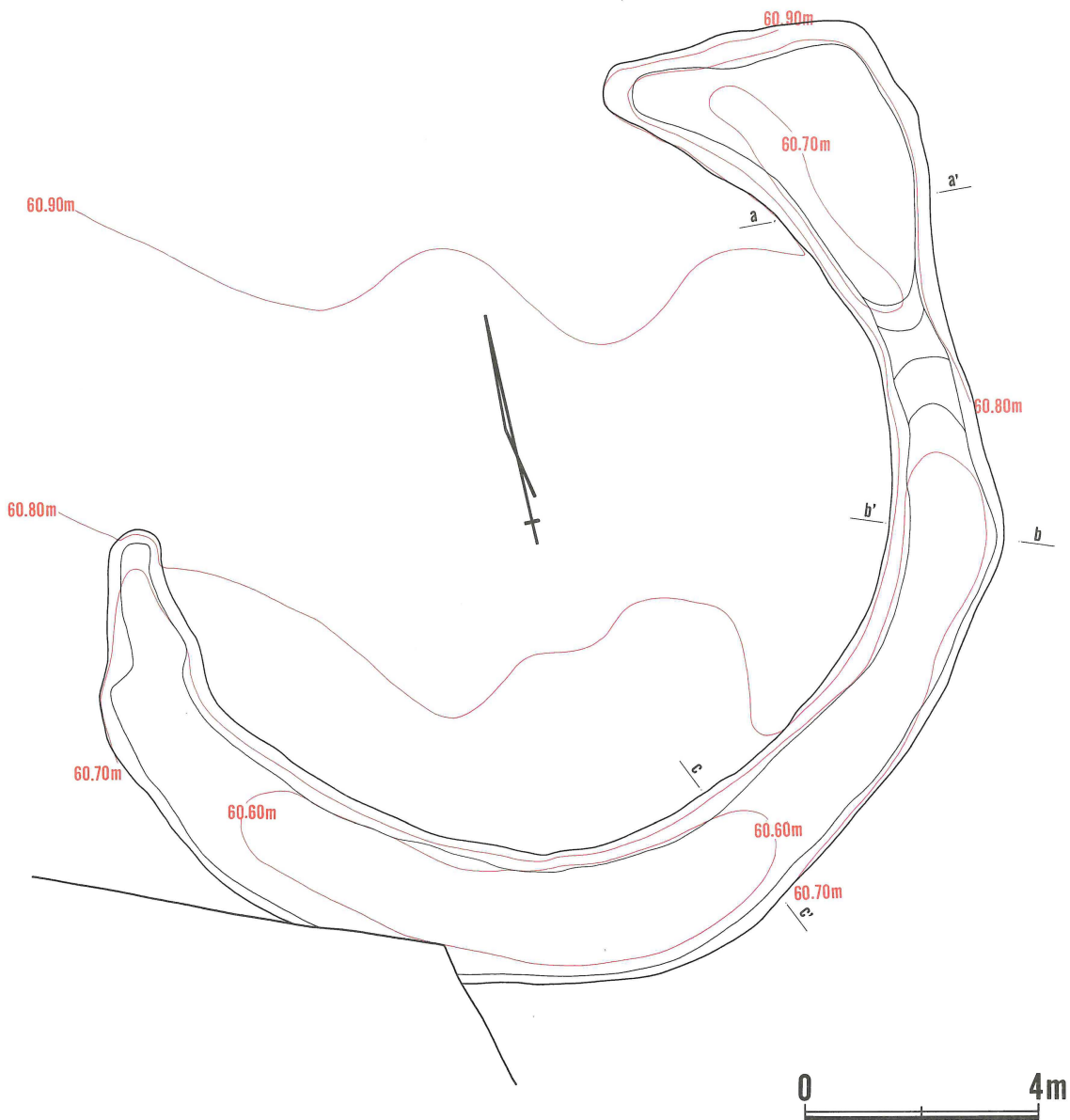
cmを測る。平面の形状はともに円形としてとらえている。

小穴内覆土はS P 163が明確に柱穴状を示すものでないが1黒色土（しまりのゆるい土）を中心に下部に3黒色土（ローム粒を多く含み黄色味をもつ堅くしまりのある土）、S P 164が2黒色土（ローム粒が若干含まれしまりのゆるい土）で構成される。尚、覆土観察からは明確でないがS P 163の方がS P 164よりも新しく感じられる。

S P 168 検出の位置はD-3 Gridである。小穴の規模は長径40cm・短径35cm・確認面から底面までの深さ38cmを測る。平面形状は不整であるが円形としたい。

小穴内覆土は、1暗黄褐色土（ローム粒・炭化粒を含むしまりのある土）を中心に2暗黄褐色土（ローム粒を多く含みしまりのある土）が囲む形で確認している。

尚、このS P 168周辺で建造物を想定できる小穴は他に確認できていない。



第18図 SD 03 実測図

IV 溝 (SD) (第16~20図)

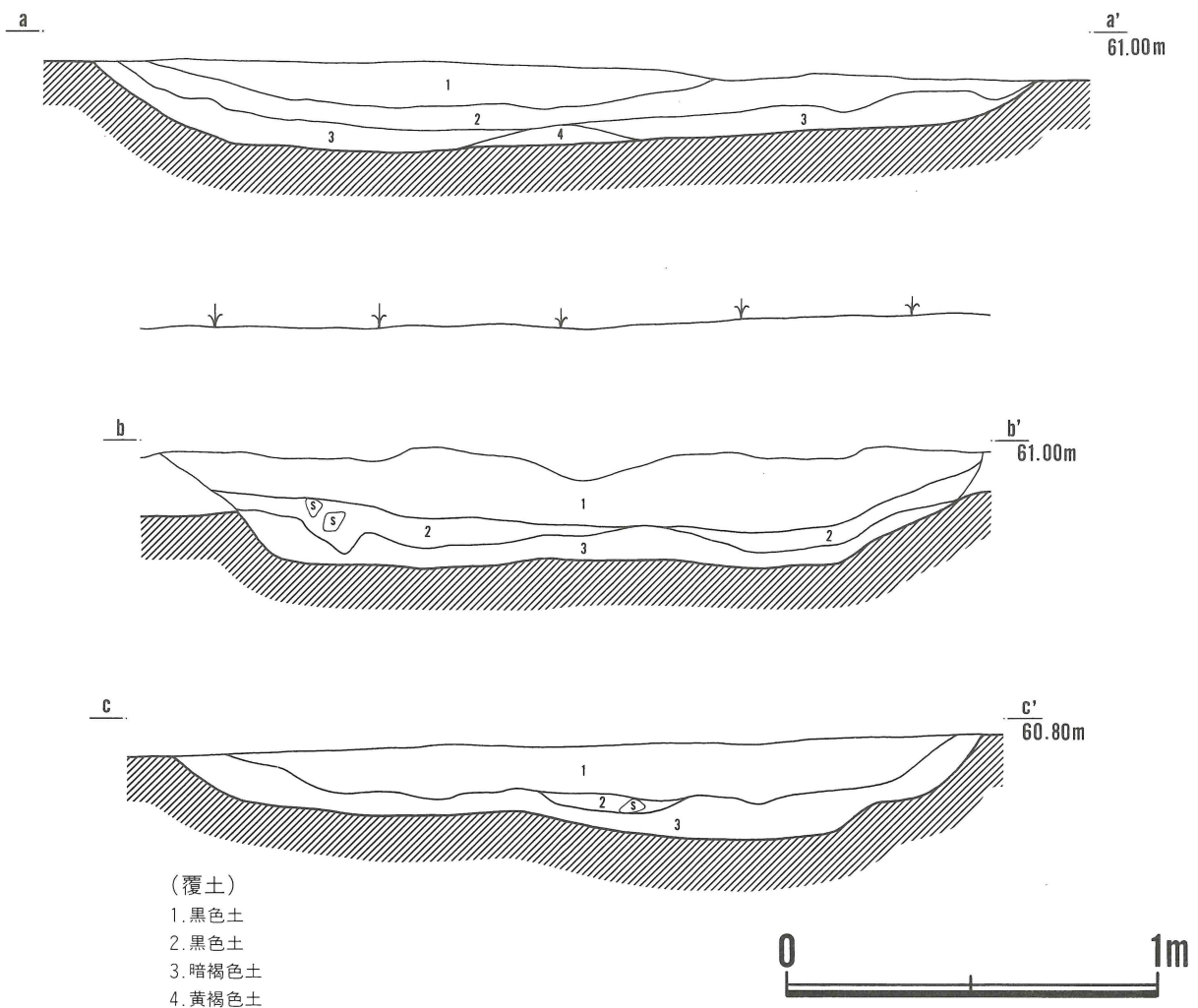
今回の調査で検出した溝状遺構は6箇所にあるが、この内SD 04・05については覆土状況・形状から現代の畑作に伴う溝と考えられる為本報では紹介は控えた。したがって以下ではSD 01~03・06の順で紹介している。

SD 01 検出の位置は調査区の東端A~B-1~4の範囲に検出。ここではSDとして扱っているが、現地での地形を考慮すると意味は全く不明であるが竪穴状遺構として扱うべきかもしれない。ただここではSD 01がまだ北側に続くと思われるので溝として扱っている。

全体の長さ・幅については明確となっていないが底面は今回の調査で検出し得たものと思われる。したがって確認面からの深さは25~35cmを測る。

覆土は1 黒色土(ローム粒・ロームブロックを含みしまりのゆるい土) 2 暗黄褐色土(ロームとの溶混が激しくしまりのある土) 3 黒色土(ローム粒多含。しまりのある土) で構成されている。

出土遺物では弥生時代の土器片と近世陶器が混在しているが、覆土状況から前者に近い時期の遺構であると考えている。



第19図 SD 03 土層断面図

S D 02

検出位置は調査区中央の北側

E-1~3 Grid の範囲である。

溝は調査区より北側（大塚古墳後円部周溝）
に向って延びており長さについては不明で
ある。幅は60cm 前後で確認面からの深さは
11~17cm を測る。また南端部で溝は小さく
なっており幅25cm・確認面から底面までの
深さ5cm と浅くなっている。

溝方向はN-19°-E で大塚古墳後円部墳
頂方向に向いているようである。

溝の掘り方は底面をほぼ平坦に、南に向
けて低くなる状況である。

溝覆土は1 黒色土（しまりのある土）、2
暗褐色土（ロームブロックを含みしまりの
ゆるい土）で構成されている。

溝からの出土遺物は弥生時代後期から古
墳時代初頭に属される土器片と近世かわら
けの破片である。

S D 03

検出位置は調査区南西域G~

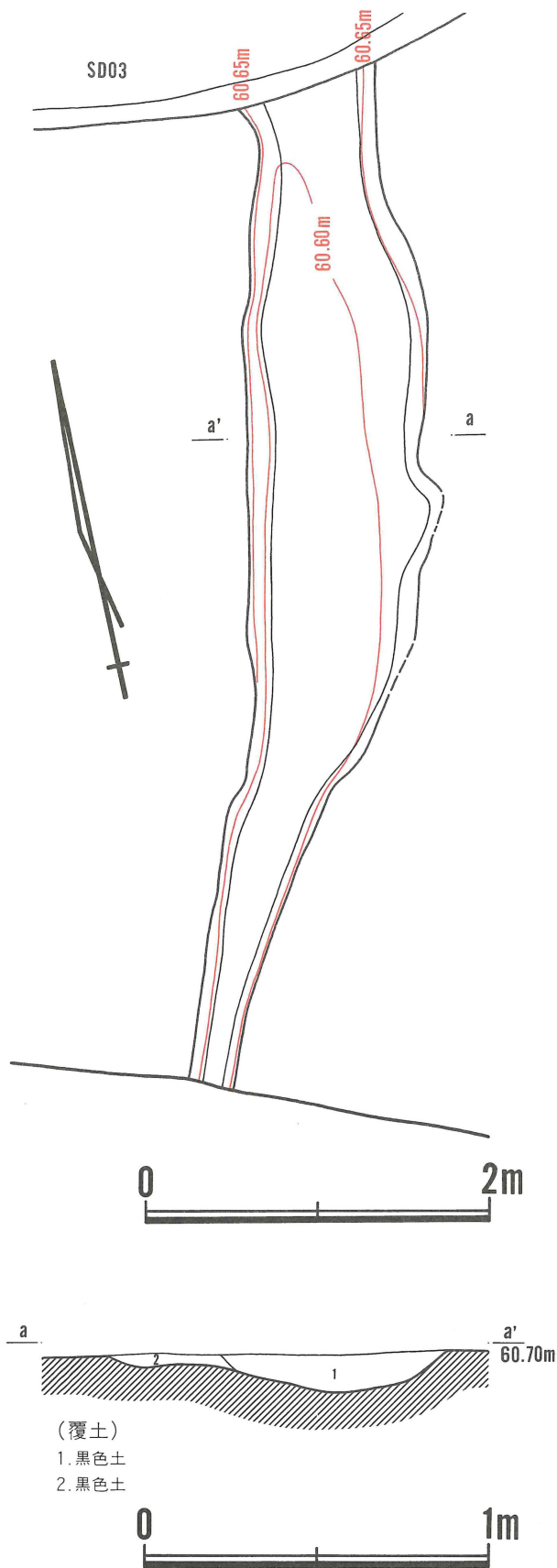
J-4~7 Grid の範囲である。

溝はI~J-4~6 Grid にかけて途切
れるものの幅132~224cm で円弧を描いて
いる。溝の確認面から底面までの深さは7
~21cm を測る。掘り方は溝南東部でテラス
状の平坦面をもつこと、G~H-5 Grid
で陸橋状に底面が浅くなること等を除いて
全体としては平坦な底面をつくり出してい
る。溝壁は円弧の内側において急傾斜を成
しているのに対し外側壁はやや緩傾斜をつ
くっている。

溝の覆土は3 地点において観察をしたが
おおむね同じ状況を示しており1 黒色土
（ローム粒散在しまりのゆるい土）、2 黒色
土（ローム混りでしまりのゆるい土）、3 暗
褐色土（ロームとの溶混が激しく黄色味を
おび、堅くしまりのある土）、4 黄褐色土
（かたくしまりのある土）である。

尚、溝南域I-7 Grid 2層から第21図
21に示した須恵器の坏身が出土している。

したがってこのことと、溝がI~J-4



第20図 S D 06 実測図

～6 Grid で途切れるものの円弧を描くことから、このS D 03 は古墳時代後期（6世紀前半）の小円墳に伴う周溝であると判断している。

S D 06 検出位置はS D 03の南域に切り合った位置H-7～8 Gridである。S D 03との新旧関係について土層観察を行っているが同じ黒色土で明確にならなかった。溝の規模は長さ不明・幅26～104 cm・確認面からの深さ3～9 cmを測る。溝はほぼN-14°Eで南北位に向いている。溝の掘り方は中央部が最も深い全体として平坦面をつくっている。また壁は浅いので確かでないが緩傾斜で立上っている。

溝の覆土は1 黒色土（ローム粒含有、しまりのゆるい土）、2 黒色土（ローム粒含有、1よりもさらにしまりのゆるい土）である。尚、S D 06からの出土遺物はなかった。

2. 遺物

今回の調査で出土した遺物はすべて土器の類である。出土土器は多くが小破片で総数ではポリコンテナ（545 × 336 × 200）1杯分にすぎない。このうち形のなる小破片を図化したものが第21～25図に掲載したものである。出土土器は、おおむね縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代後期、近世に属されるものである。以下遺物番号の順序はくずれるが時代別に紹介していく。

i 縄文時代（第24図50～52）

50・52は赤褐色を呈し石英・長石・砂粒・金雲母を含有する胎土で、51は黄褐色で石英・砂粒を含有する。50は隆帯上に竹管状工具を押圧し、隆帯に沿って半截竹管状工具で平行に押し引きの連続刺突が施されている。51は、深鉢の口縁部破片で半截竹管状工具による連続爪形文が3条施されている。52は深鉢の胴部破片で無文である。以上のことから50・52は縄文時代中期中葉阿玉台Ⅱ式あるいは勝坂2式に比定されるもの、51は縄文時代中期前葉北裏CⅠ式系統の土器と思われる。

ii 弥生時代（第21～25図1・3～17・19・20・22～49・53～76）

今回の出土遺物の大半を占める。

1はS B 01唯一の出土土器である。1は壺形土器の胴部小破片で表面はナデかヘラ磨が施されている（保存状況が悪く明確でない）。

3～13はS F 06（S D 01内に検出したものであるが、その後検討してS X扱いとした）からの出土土器である。3・4は壺形土器の胴部破片で、3には羽状縄文が4には縦位にハケ目が認められる。尚4の裏目には荒いハケ目（板目のよう）が確認できる。5は高坏の脚部で、上部に縦位のハケ目下部に横位のハケ目が認められる。6～13は甕形土器であるが、7～10は同一個体の台付甕かと思われる。6は口径11.8 cmを測る甕形土器の口縁部破片で、口縁部を粘土貼付によって断面三角形状に形づくる。口縁部外側上坦面に横位のハケ目（櫛描きと呼ぶべきか？）、下坦面にナデ、内面には斜位ハケ目の後横位ハケ目が施されている。肩部外面には斜位ハケ目、内面には板ナデが認められる。7～10は胴部破片で斜位にハケ目、内面にナデ若しくは板ナデが施されている。11～13は台付甕の台部破片で外面に縦位ハケ目が、内面には11には横位のハケ目、12・13にはナデが認められる。

14～16はS F 08からの出土土器である。14は底形9 cmを測る壺形土器の底部破片である。外面は

ナデが、内面にはハケ目が認められる。15は甕形土器の口縁部破片で、口唇部には担面というほどの担面は認められず、比較的深いハケによる刻み目が認められる。16は台付甕の胴と台部の接続部位で外面は斜位にハケ目、内面はナデが認められる。

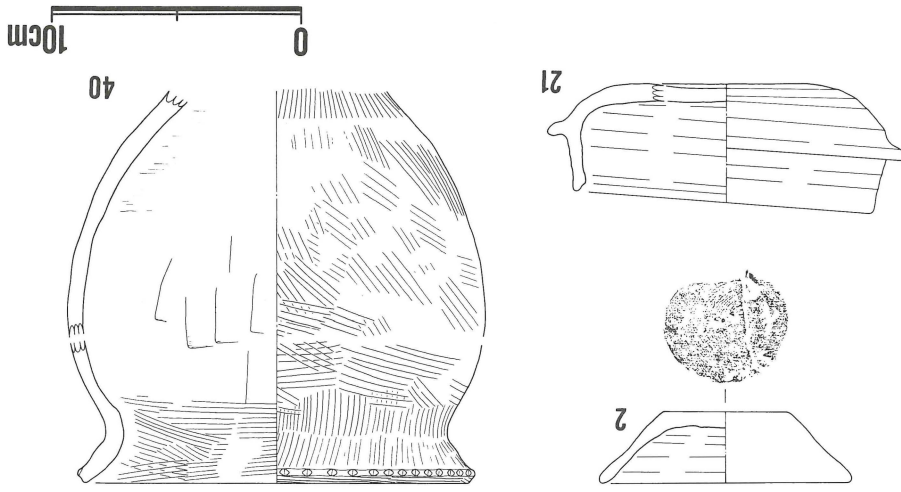
17はS D 01 からの出土土器である。壺形土器の胴部破片でハケ目が施されている。

19はS D 02 からの出土土器である。甕形土器の胴下半部でハケ目が施されている。

22～24はS D 03 からの出土土器で、22・23は壺形土器、24は台付甕の接続部である。22は頸～肩部の破片で内外面ともにナデが、23は胴部破片で外面がナデ、内面は板ナデが認められる。24は外面にハケ目、内面にナデが認められる。

25～49は小穴からの出土土器で、25・26がS P 36、27がS P 50、28がS P 70、29・30がS P 78、31・32がS P 88、33がS P 92、34がS P 124、35がS P 128、36がS P 142、37がS P 155、38がS P 168、39がS P 195、40がS P 197、41・42がS P 302、43がS P 337、44・45がS P 347、46がS P 358、47がS P 388、48がS P 467、49がS P 473 からの出土である。25は壺形土器の肩部破片で器面に櫛刺突羽状文が施されている。26は壺形土器の胴部破片で上部にハケ目、下部に横位のヘラ磨きが認められる。27は折返し口縁をもつ壺形土器の口縁部付近の破片で器面には表面にハケ目、内面には上部に縄文、下部に櫛描波状文が施されている。28は折返し口縁をもつ壺形土器の口縁部破片である。内面および端部には縄文が施文されている。29も同じく折返し口縁をもつ壺形土器の口縁部破片で、内面には羽状縄文に円形浮文、端部には縄文、外面にはハケ目が認められる。30は台付甕形土器の胴部破片で、内面にナデ、外面にハケ目が認められる。31は壺形土器の頸部破片で上部にハケ目下部にナデが認められる。32は単口縁の壺形土器口縁部破片である。内面には櫛描き扇形文が施され外面にはハケ目が認められる。33は高坏の脚部破片で、外面には上部に櫛刺突羽状文、下部には縦位にヘラ磨きが施されており、内面にはハケ目が認められる。34は壺形土器の胴下半部破片で、外面にはハケ→ヘラ磨きが、内面にはナデがそれぞれ認められる。35は単口縁の壺形土器口縁部破片で、内面および端面には縄文が施文されており、外面にはハケ目が残る。36は台付甕形土器の胴下半部破片である。外面にはハケ目、内面には板ナデが認められる。37は台付甕形土器の口縁部破片で、外面上部に縦位ハケ目、下部に斜位ハケ目、口唇部には櫛描沈線と比較的明瞭な刻みが施されている。また内面上部には横位にハケ目が認められる。38も台付甕形土器の口縁部破片である。37と同様の調整が見られるが、37に比べ端部の面が丸く刻みも浅い。39は壺形土器の頸部～肩部破片である。上部から縦位ハケ目、横位ナデ、櫛押圧横線文、縄文それぞれが施されている。また内面上部には横位にハケ目が認められる。40は、口径 15.3 cm 胴部最大径 16.8 cm を測る台付甕の上位部である。口唇部に担面をもち、担面には横位にハケが、また口唇部外側にはハケによる刻みが施されている。胴部外面は上面から縦位ハケ目、斜位ハケ目→横位ハケ目、縦位ハケ目が認められる。内面は上部から横位ハケ目、板ナデがそれぞれ認められる。41・42は共に台付甕形土器で、41は胴上部、42は胴下半部破片である。共に器面にはハケ目が認められる。43は壺形土器の肩部破片で、櫛刺突羽状文が施されるものである。44は壺形土器の底部破片である。外面上部にはヘラ磨き、下部には縦ハケが認められる。内面には板ナデ痕が残るものである。45は6で紹介した甕形土器と同器形の土器である。6と比較して端部が丸く仕上げられており、口縁部はナデにより調整が成されている。外面は口縁部がナデ、胴部は斜位方向にハケ目が認められる。46は壺形土器の肩部破片で、断面三角形の貼付隆帯が消失している。この部位の上部にはハケ目が認められる。47は台付甕形土器の接合部破片で、外面には縦位にハケ目、甕部内面にはナデ、台部内面にはハケ目がそれぞれ認められる。48・49は台付甕形土器の胴部破片で、48は胴上部、49は胴下半部である。外面には48が縦位ハケ目と斜位ハケ目が、49には縦位ハケ目が認

第21図 出土遺物実測図(1)



cm 底径 12.3 cm ・ 器高 4.8 cm ・ 受部 からの立ち上り 2.3 cm を測る。立ち上りの端部と受部の端部は丸くつくり出されており、立ち上り端部内側に浅い沈線がめぐっている。体部は低く、底体部の高さは立ち上りの高さに比べて低い。また底部のへり削

古墳時代の遺物は、S D 03 から出土した須恵器坏身(第21図21)のみである。

III 古墳時代 (第21図21)

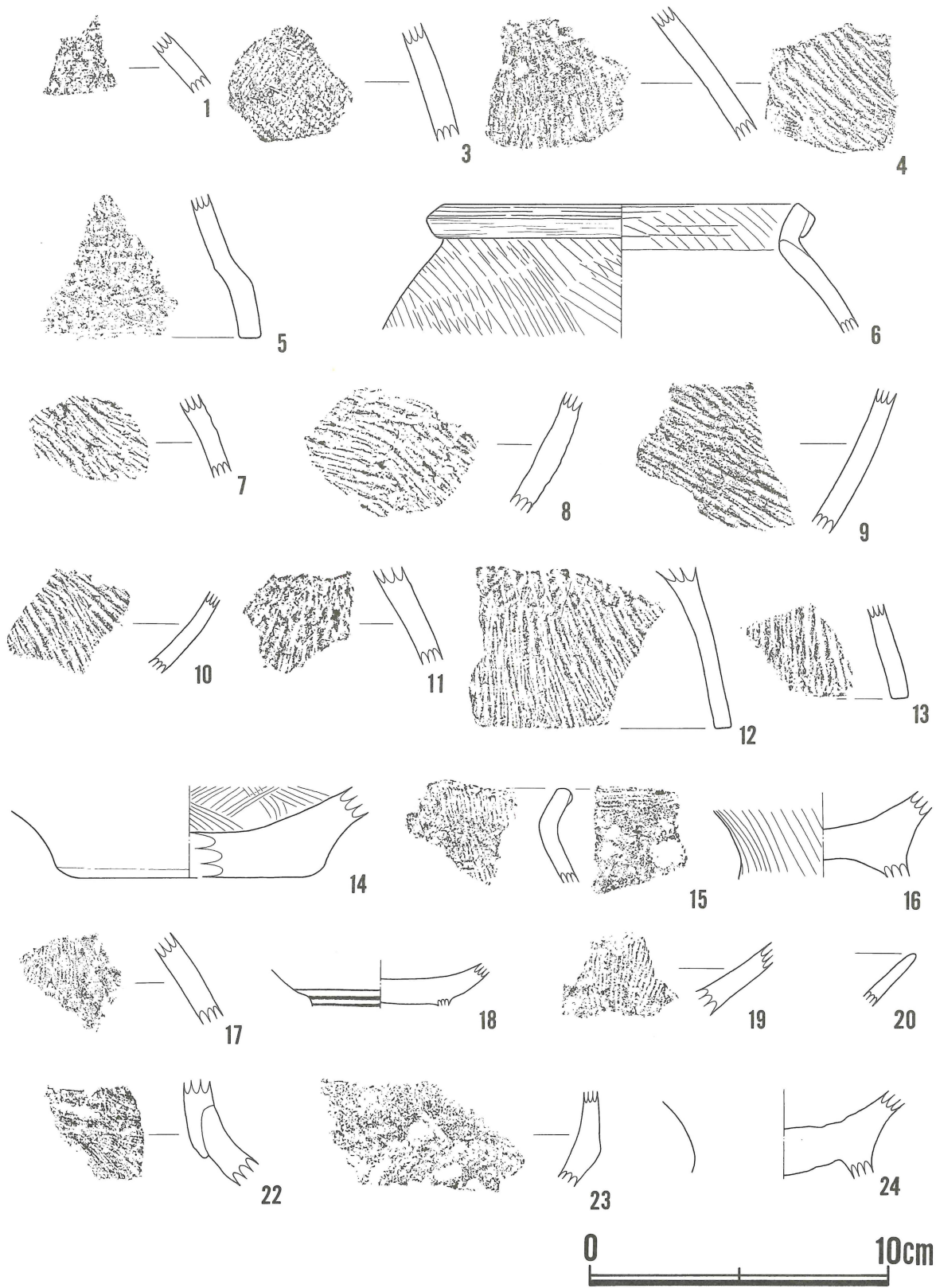
面には保存状態が悪いがハケ目が認められる。

65・66は高坏の坏身口縁部ならびに口縁部付近の破片である。いずれも外面にはハケ目、内面にはへり磨きが施されている。66の口縁部破片には、粘土貼付によって面がつくりだされており、坦面には櫛状工具による沈線と刻みが施されている。

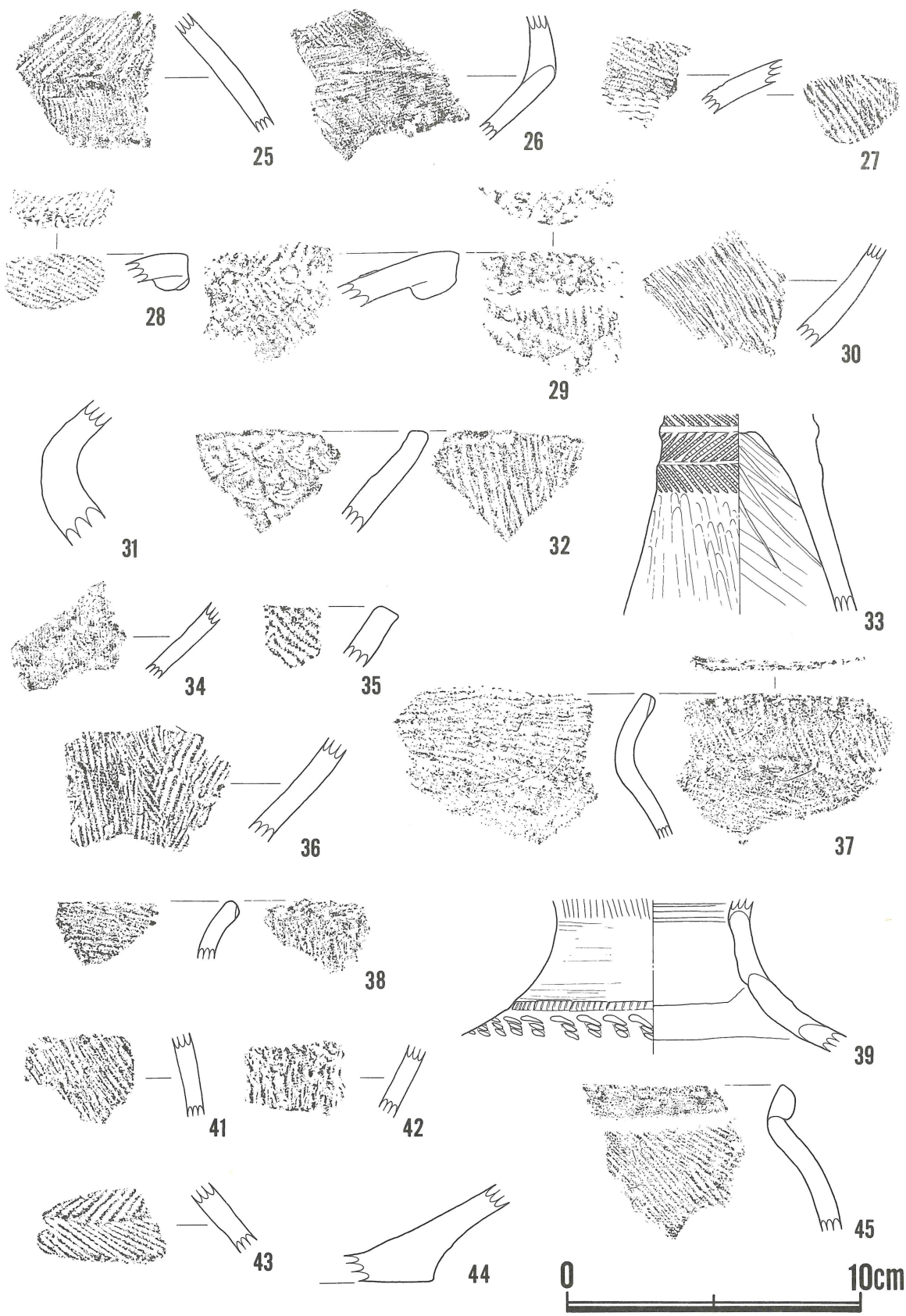
67は甕形土器の口縁部破片で、内面には横ハケ、外面には縦ハケが認められる。口唇部には坦面がつくり出されており、坦面には櫛状工具による条線と端部に刻みが施されている。68は甕形土器の頸部から肩部にかけての破片で、頸部内面に横位ハケ目、外面に縦位ハケ目、肩部内面にナツ、外面に横位ハケ目がそれぞれ認められる。69～75は甕形土器の上～下半破片で、いずれも斜位ハケ目が施されている。内面はナツ若しくは板ナツにより仕上げられている。76は台付甕形土器の接合部位で、外面には保存状態が悪いがハケ目が認められる。

64は甕形土器の底部破片で、外面にはハケ目へり磨きが認められる。内面は、63に板ナツ、64にで、外面はハケ→横位のへり磨き→丹彩が確認できる。内面は板ナツにより仕上げられている。63・62は甕形土器の胴部下半破片の下部にナツが認められる。59～61の内面はいずれもナツ調整である。62は甕形土器の胴部下半破片認められる。59～61は甕形土器の胴部上半破片で、59の外面にはハケ目とそ状文(かなり粗雑)、58の外面には櫛描波状文とナツが施されている。尚内面はいずれもナツ調整が肩部破片で、55の外面には櫛刺突羽状文と縄文施文が、56の外面には縄文施文、57の外面には櫛描波状文(かなり粗雑)、58の外面には櫛描波状文とナツが施されている。尚内面はいずれもナツ調整が甕形土器の頸部破片で、外面には縦位へり磨き、内面にはナツが認められる。55～58は甕形土器の複合口縁をもつ甕形土器の口縁部付近の破片で内外面にナツの痕が残る。54は単純口縁をもつ土器の破片である。

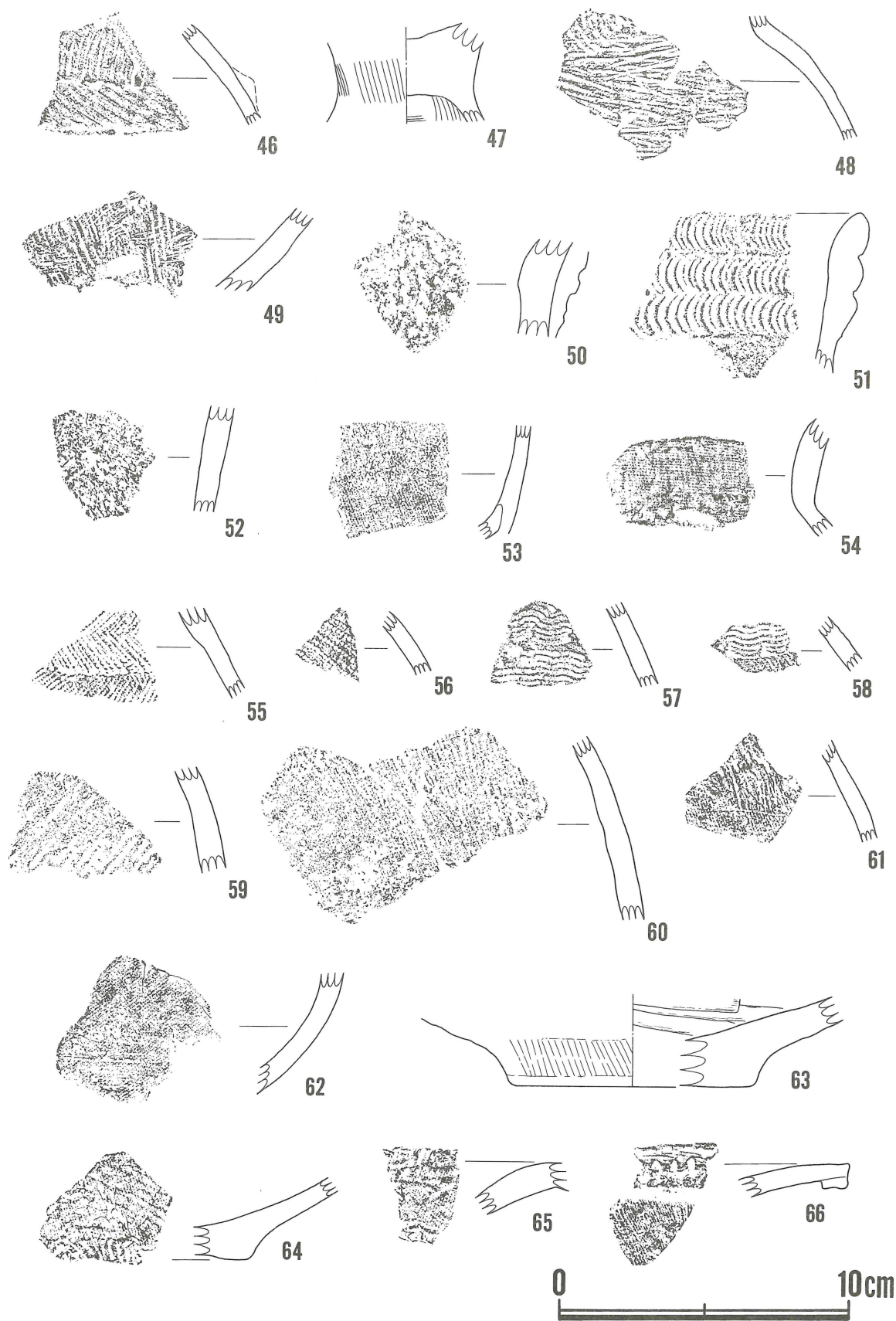
53～76はすべて遺構外出土土器で、このうち53～64が甕形土器、65・66が高坏、67～76が台付甕形められ、内面にはそれぞれ板ナツが残っている。



第 22 图 出土遺物実測図(2)



第 23 图 出土遺物実測図(3)



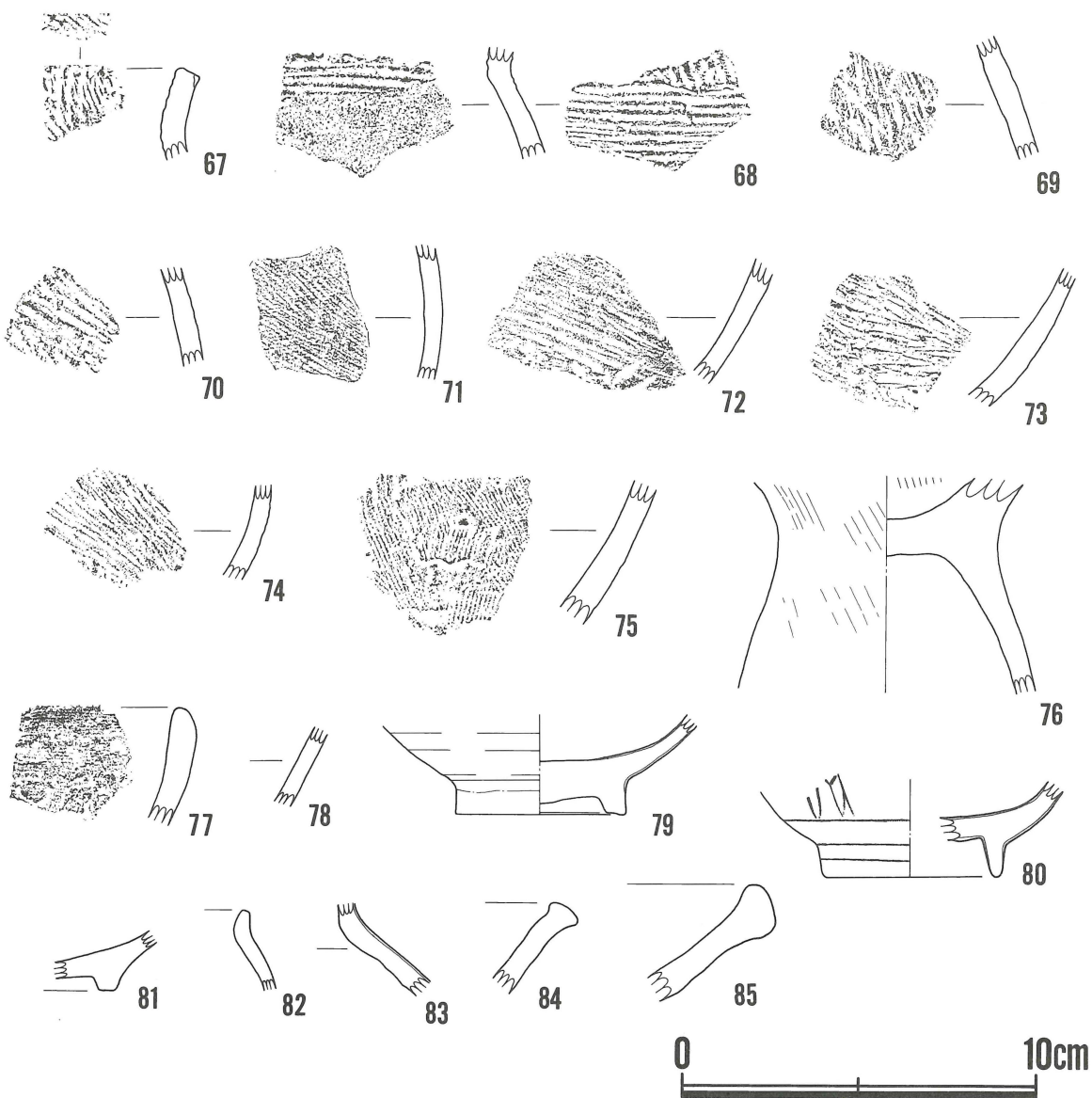
第 24 图 出土遺物実測图(4)

りは底体部の $\frac{1}{2}$ まで認められる。

iv 近 世 (第21図2、第22図18・20、第25図77~85)

近世時代に属する資料として、土師質のかわらけ(2・20)、土師質の椀(77)、陶磁器の碗(78・79)・皿(81)・壺(82・83)・鉢(84・85)、染付け碗(18・80)が出土している。このうち遺構からの出土資料は、SF 01 から2、SD 01 から18、SD 02 から20の出土である。

形のわかる資料2について説明を加えると、口径10cm・底径5cm・器高2.8cmを測る大きさで、胎土の色調は赤黄褐色を呈する。また胎土中には小砂利等は含まれておらず、焼成・しまりともに良好である。底部切り離しは糸切りで行われており、内外面の整形・調整にはナデが施されている(外面については磨耗によりナデ痕の残りが明瞭でないが)。口縁部端部は丸く仕上げられており、体部に比べやや厚く仕上げられている。



第25図 出土遺物実測図(5)

Ⅲ 成 果 と 課 題

前章で述べたように今回の発掘調査では、竪穴式住居跡（S B）1、土坑（S F）7、小穴（S P）458、溝状遺構（S D）6、時代・意味不明遺構（S X）30等が確認された。このうち所属時代の明確な遺構は、弥生時代後期（菊川式期）の竪穴式住居跡S B 01・土坑S F 03・S F 08・小穴S P 1～458と、古墳時代後期（6世紀前半）の古墳周溝S D 03である。

したがって今回の発掘調査で知り得た成果としては大きく2つのことが掲げられる。まず1つは、弥生時代後期における高田上ノ段遺跡集落の西限の一部が確認できたこと。もう1つは、和田岡古墳群（古墳時代中期、5世紀代に盛期をもつ）の終段階とも言える古墳が発見された、この2つではないかと考える。

このうち前者については、今回の調査地点の南東隅においてS B 01を検出していること、458という数多くの小穴のうち竪穴式住居の柱穴と思われる小穴が4本1組で何箇所か確認できること、小穴が今回の調査区では真中から東域においてのみ検出していること等から推測される。またS F 03・S F 08から検出の礫の出土状況でも流れ込みが確認できており明らかに人間の足どりが復原されるものである。幸いにして今回の調査で推測される高田上ノ段遺跡の弥生時代後期集落跡中心部は、現在在来種茶樹園のままであり保存状態も良好かと思われる。

次に後者であるがまず始めにS D 03からの出土須恵器坏身（第21図21）の所属する時期について検討したい。この須恵器（21）の特徴については前述のとおりで、①口径12.0 cm・底径12.3 cm・器高4.8 cm・受部からの立ち上り2.3 cmを測る大きさ、②立ち上りと受部の端部が丸くつくり出されている、③立ち上り端部内側に浅い沈線がめぐっている、④体部の高さは低くつくられており、底体部の高さは立ち上りの高さに比べて低くなる、⑤底部のヘラ削りは底体部全体の $\frac{1}{2}$ まで認められる、等である。ここで陶邑古窯跡群の出土資料と比較してみると、田辺昭三氏⁽³⁾によれば「MT 15：坏：大型化がいちぢるしい。たちあがりはやや内傾度が大きい。端面は内側へ傾斜し、浅く凹むものもある。受部は概ね外上方または水平にのびるが、端部の稜はあまい。底部は一般に扁平な感じで、ヘラ削りは底部全体の $\frac{1}{3}$ 弱である。削りはあらく全体に調整不十分である。TK 10：坏：MT 15にひきつづき坏は大型である。たちあがり端部に面をもつものは消滅し、すべて丸くおさめている。受部先端も、たちあがり端部と同様、丸くおさめている。底部の形態はMT 15と大差ないが、ヘラ削り部分はさらにせまくなっている。」となる。また中村浩氏⁽⁴⁾によれば「Ⅱ型式1段階……坏身は蓋部の口径変化と同様に大型化している。たちあがりは比較的長く、内傾気味にたちあがっており、その端部は内傾する明瞭な段をなしている。成形はマキアゲ・ミズビキ手法によっており、たちあがりは受部内面に沈線を認める例が多くみられることから、オリコミ手法によっているものが大半であるといえよう。また内底面中央には同心円叩き、あるいは、円弧叩きがスタンプされており、底外面に施される回転ヘラ削り調整も全体の $\frac{1}{2}$ 前後となり、……。Ⅱ型式2段階……坏身はたちあがり比較的短く内傾し、端部は丸く仕上げられている。受部は比較的長く、端部は丸い。底体部は口縁に比較して浅く、蓋と同様扁平な感を与えている。手法はマキアゲ・ミズビキ成形によっており、たちあがりはオリコミ手法によっている。底部の外表面 $\frac{1}{2}$ 以上に回転ヘラ削り調整が施されており、……。これらの説明に対しS D 03の21を比較してみると、立ち上り端部内側の浅い沈線をMT 15あるいはⅡ型式1段階に見られる“段”の名残りとしてとらえるならば、おおむねTK 10・Ⅱ型式2段階に比定されるものと思われる。ところでこの段階の県内の状況をみると、川江秀孝氏⁽⁵⁾によればⅡ期後半に比定される。

ただしこのうち袋井市大門大塚古墳の資料⁽⁵⁾(図一2、39・42・45の坏身)と比較すると、立ち上り端部に面をもたないこと、立ち上り端部・受部先端が丸くおさまられていること、底部ヘラ削り部分がせまくなっていること等により、高田上ノ段遺跡出土資料(21)の方が古く位置付けられるものと思われる。こうしてみて、今回の調査で新発見となったSD03をもつ古墳はほぼ6世紀前半代に比定されるものと思われる。

このSD03をもつ古墳は平面図から復原すると確認面で直径13.00m、溝内側下場間の直径13.60mを測る小円墳となる。この小円墳が北に隣接する吉岡大塚古墳の陪塚であるのか、あるいは造営時期から和田岡古墳群⁽⁶⁾の終えん形態となるのか、今後の和田岡原における発掘調査によって明らかとしなければならない一つの課題がここに生まれてきたのである。ちなみに、和田岡原が原野谷川を挟んで対岸の掛川市本郷には6世紀後半横穴式石室をもつ長福寺1号墳⁽⁷⁾があり、やや遅れて6世紀後半から7世紀前半にまで築造された宮坂横穴群⁽⁸⁾・古戦横穴群等が存在している。

以上述べてきたように今回の発掘調査では、形の復原可能な遺構の発見はかなり少ないのであるがこれから課せられた題材は数多く存在することとなった。今後遺跡の保護・調査を引き続き行い、和田岡原ならびに周辺域における遺跡の動態を解明していきたいと考えている。

<註ならびに引用・参考文献>

1. 中嶋郁夫他『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告I』磐田市教育委員会(1981)
2. 寺田義昭・永井義博他『土橋遺跡——基礎資料編——』袋井市教育委員会(1985)
3. 田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ研究論集第10号(1966)
4. 中村浩他『陶邑Ⅲ——本文編——』財団法人大阪文化財センター(1978)
中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房株式会社(1981)
5. 川江秀孝「静岡県下の須恵器について」『静岡県考古学会シンポジウム2 須恵器——古代陶質土器——の編年』静岡県考古学会(1979)
6. 吉岡伸夫「中期古墳の分布」『掛川市遺跡分布調査報告I』掛川市教育委員会(1984)
内藤晃編『春林院古墳』春林院古墳調査委員会(1966)
植松章八・平野吾郎・岩井克允『瓢塚古墳 測量調査報告書』掛川市教育委員会(1979)
植松章八・岩井克允『吉岡大塚古墳 測量調査報告書』掛川市教育委員会(1980)
植松章八・平野吾郎・岩井克允他『名和金塚古墳 測量調査報告書』掛川市教育委員会(1981)
松本一男『行人塚遺跡発掘調査概報』掛川市教育委員会(1983)
松本一男『女高遺跡発掘調査概報』掛川市教育委員会(1985)
7. 渡辺康弘「古墳時代後期」『掛川市遺跡分布調査報告I』掛川市教育委員会(1984)
8. 渡辺康弘 同 上
渡辺康弘「原野谷川流域の横穴群」『遠江の横穴』静岡県教育委員会(1983)
9. 大塚淑夫他『横添古墳群板沢支群発掘調査報告書』岡部町教育委員会・東海大学工業高等学校考古学研究部(1982)

圖 版



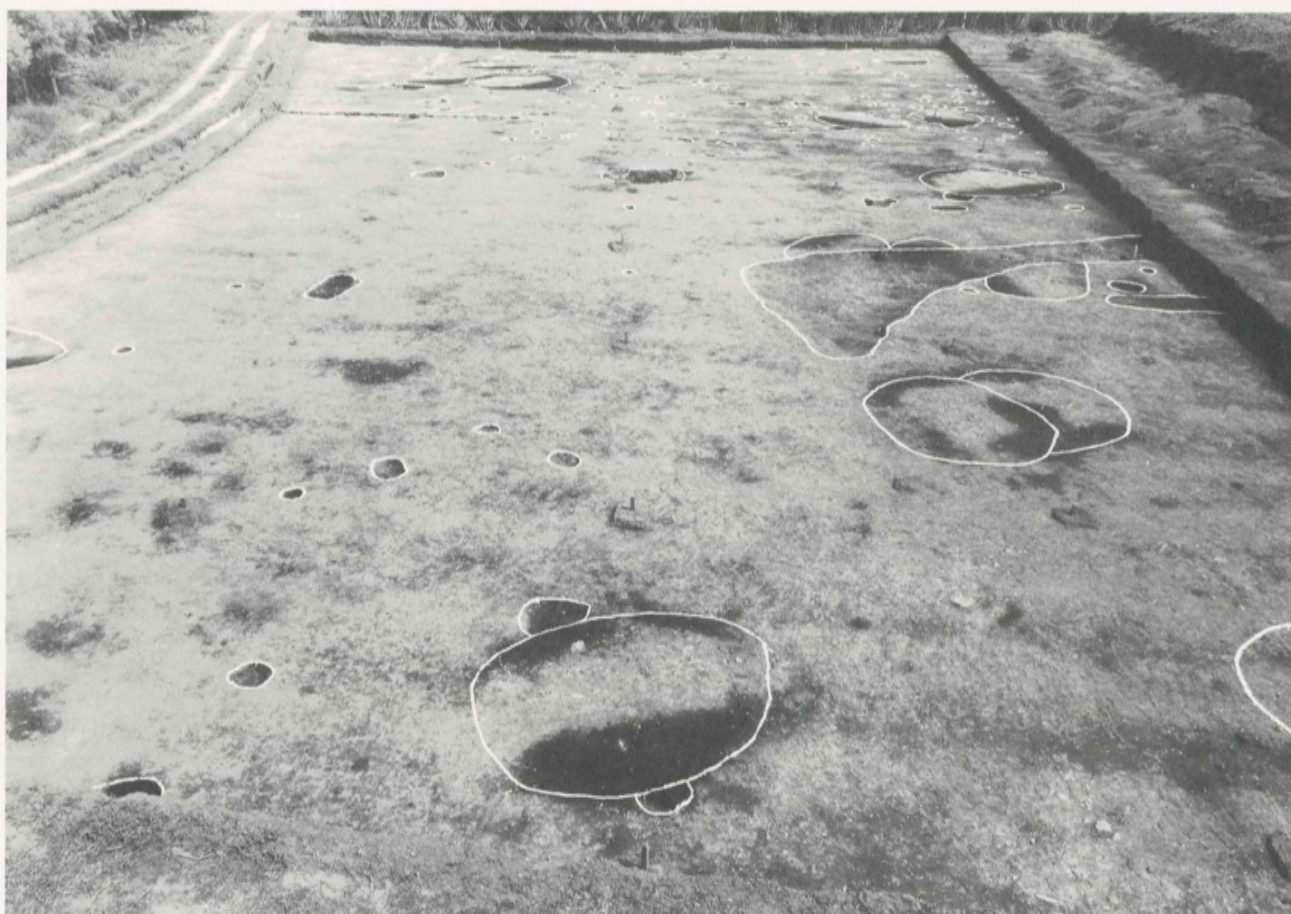
遺跡遠景(調査地点矢印交点)



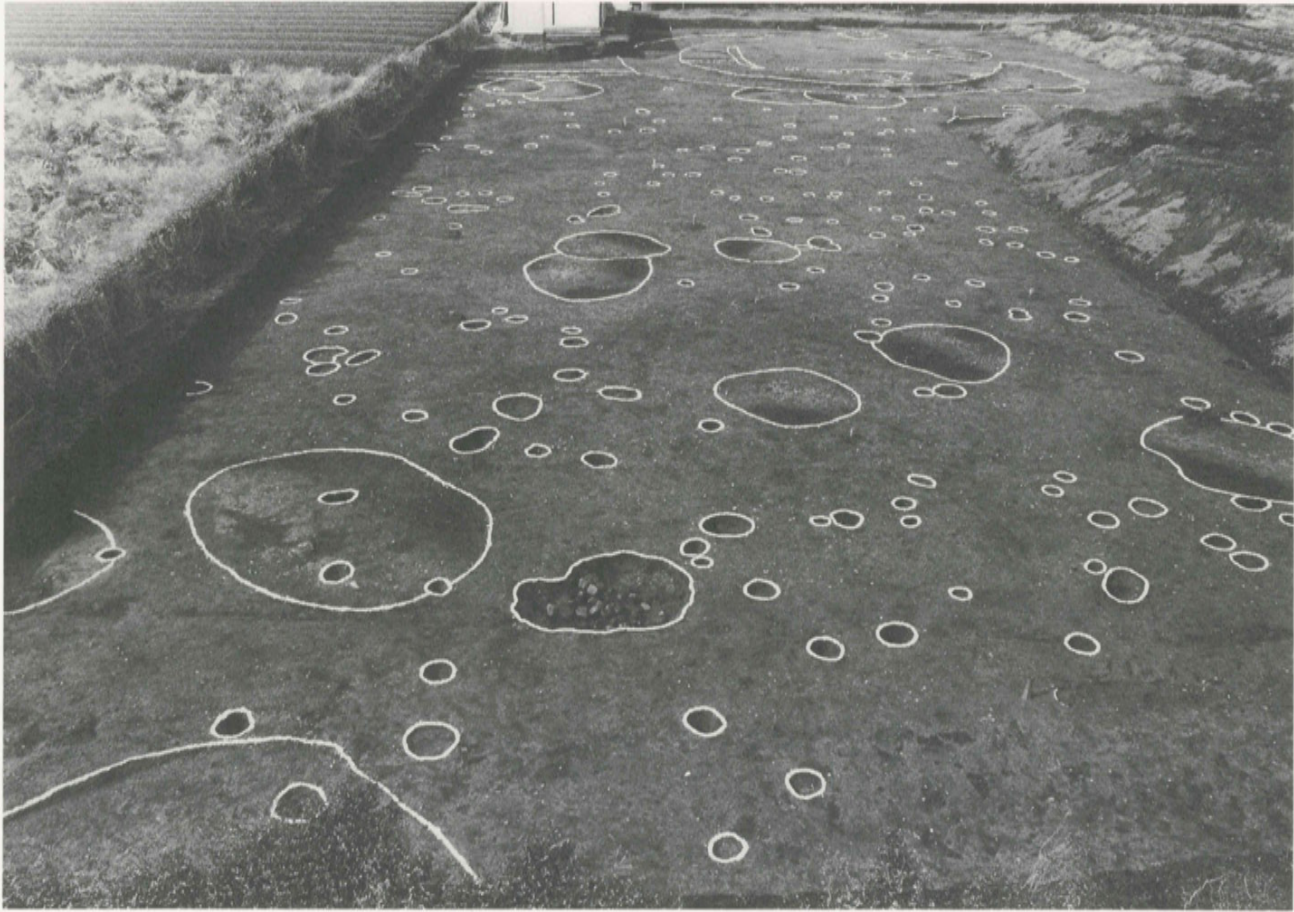
調査区全景 発掘調査前(東から)



調査区全景 前半分完掘状況(東から)



調査区全景 前半分完掘状況(西から)



調査区全景 後半分完掘状況(東から)



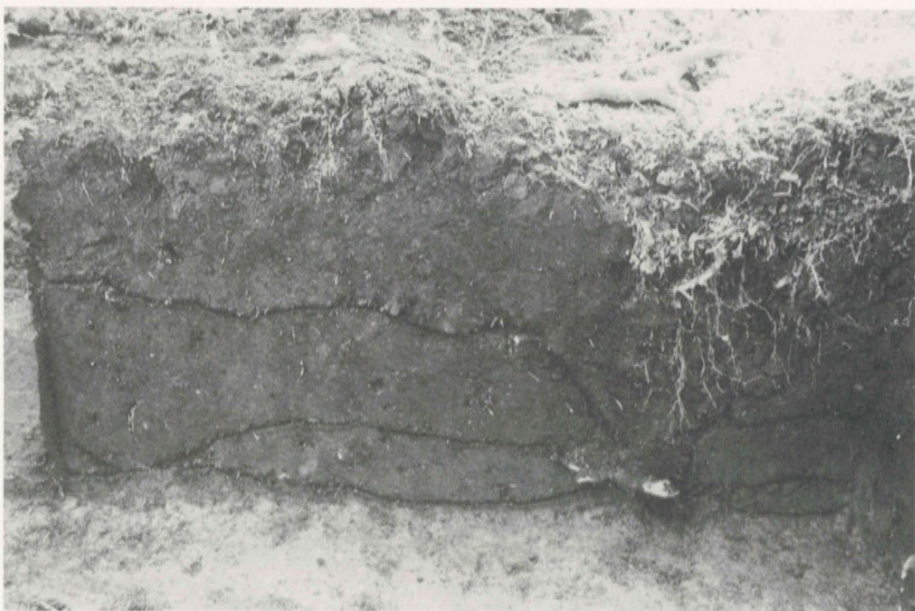
調査区全景 後半分完掘状況(西から)



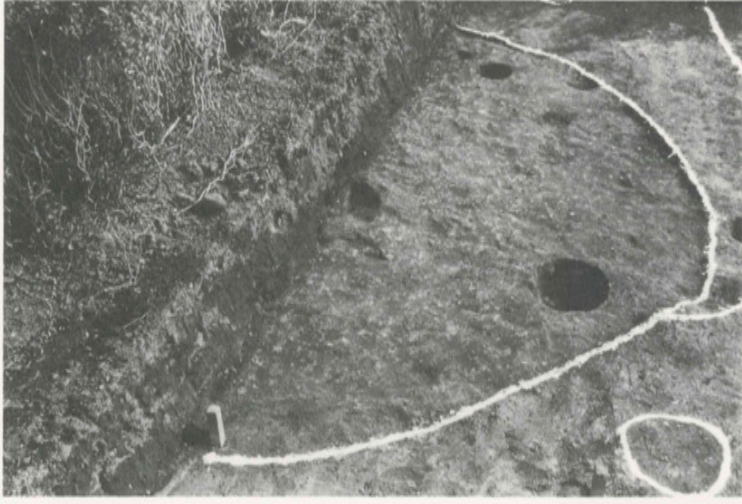
調査区土層確認状況(1)
(調査区北西隅)



調査区土層確認状況(2)
(調査区西壁)

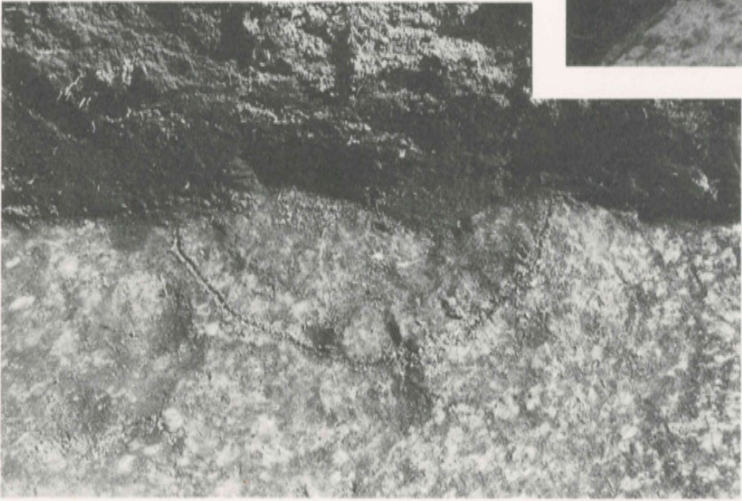
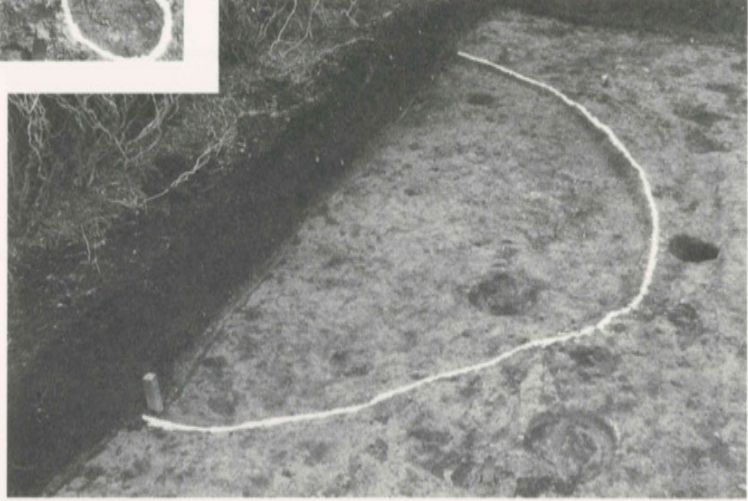


調査区土層確認状況(3)
(調査区南壁)

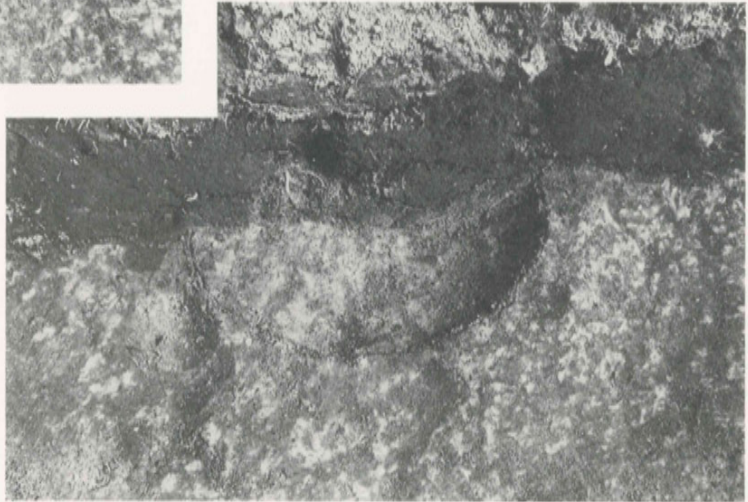


SB01床面検出状況

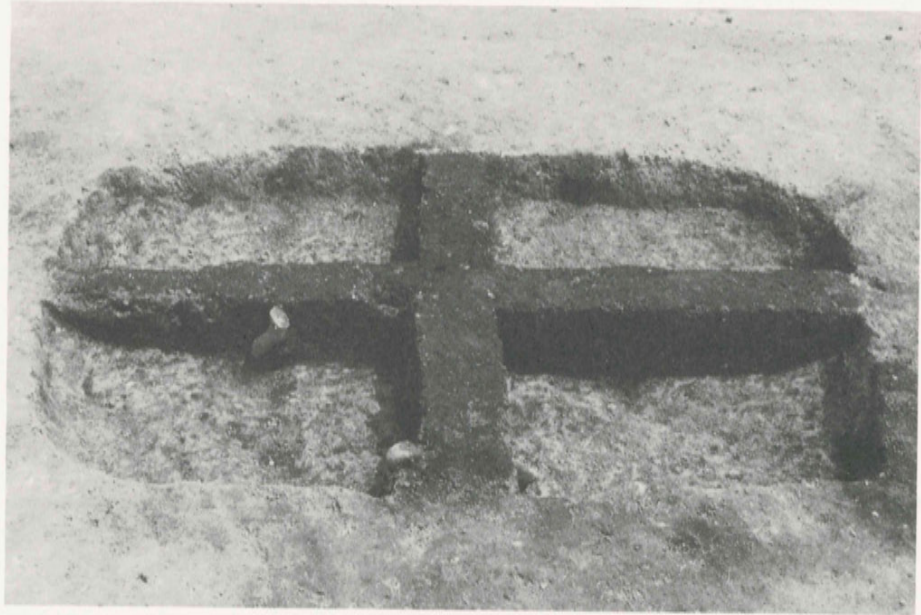
SB01完掘状況



SB01炉検出状況



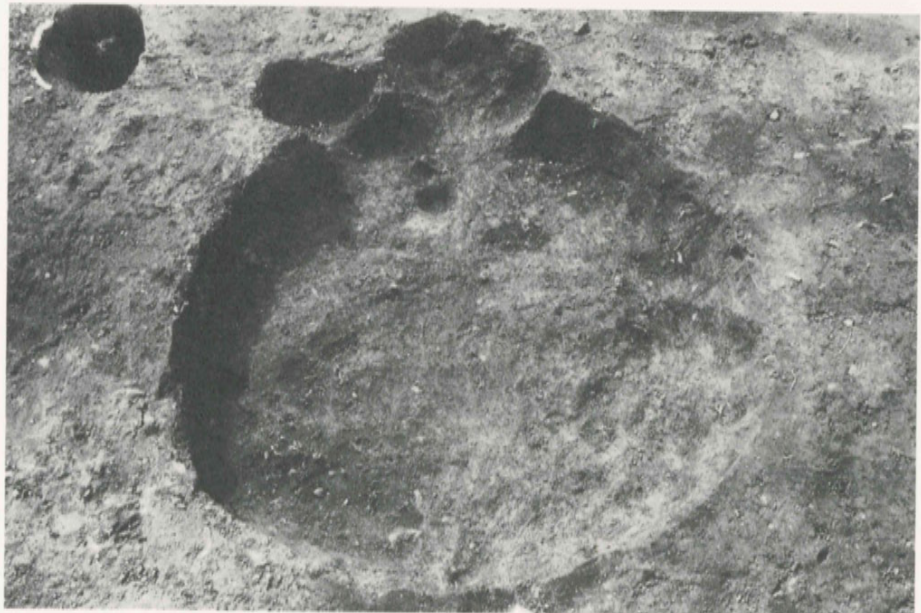
SB01炉完掘状況



SF01土層確認状況
(西から)



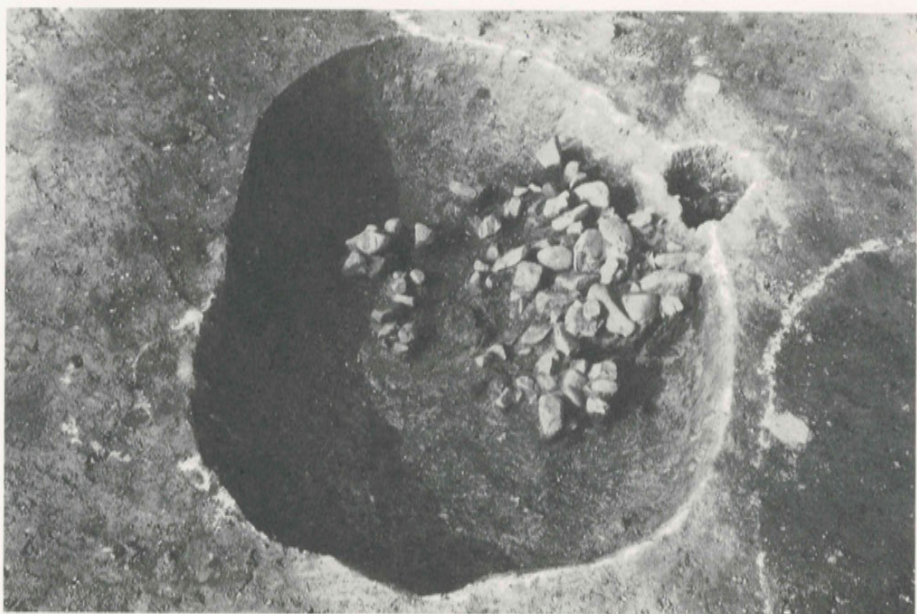
SF01完掘状況
(西から)



SF02完掘状況
(東から)



SF03礫出土状況
(東から)



SF03礫出土状況
(南から)

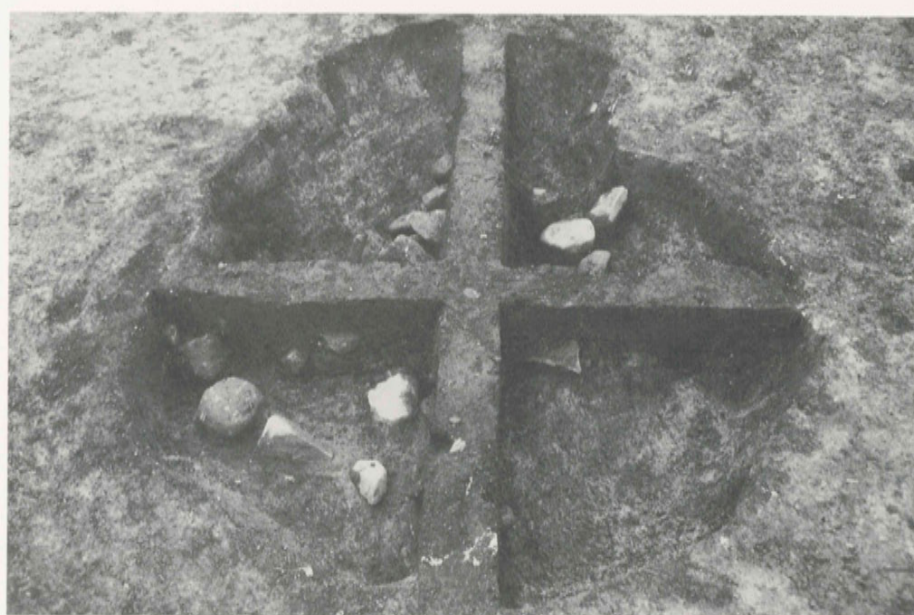


SF07完掘状況
(西から)

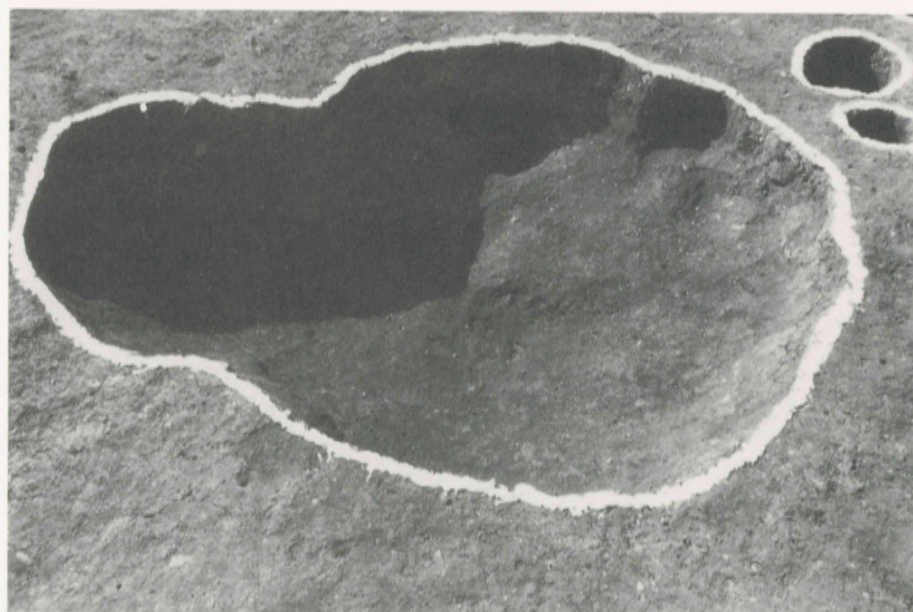
SF08土層確認状況
(西から)

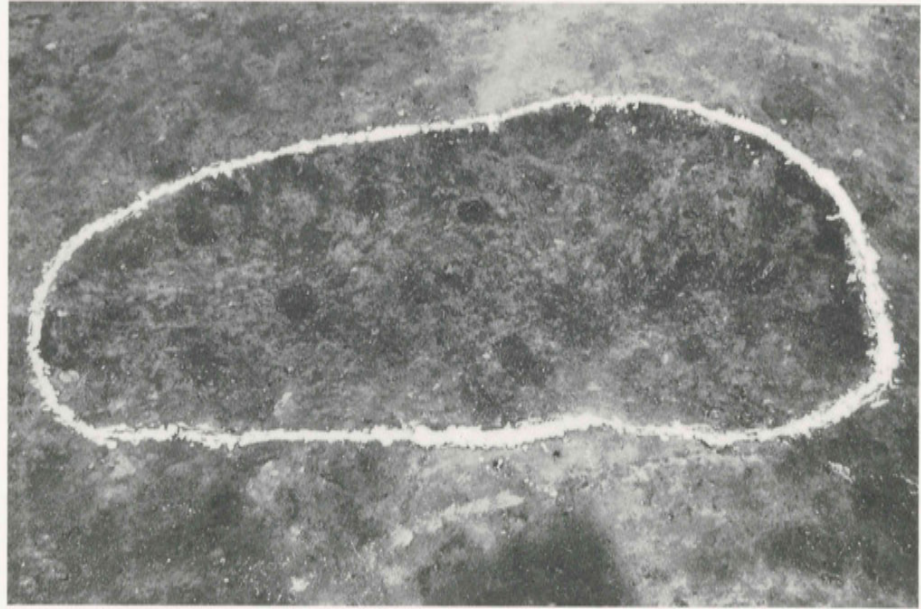


SF08土層確認状況
(北から)

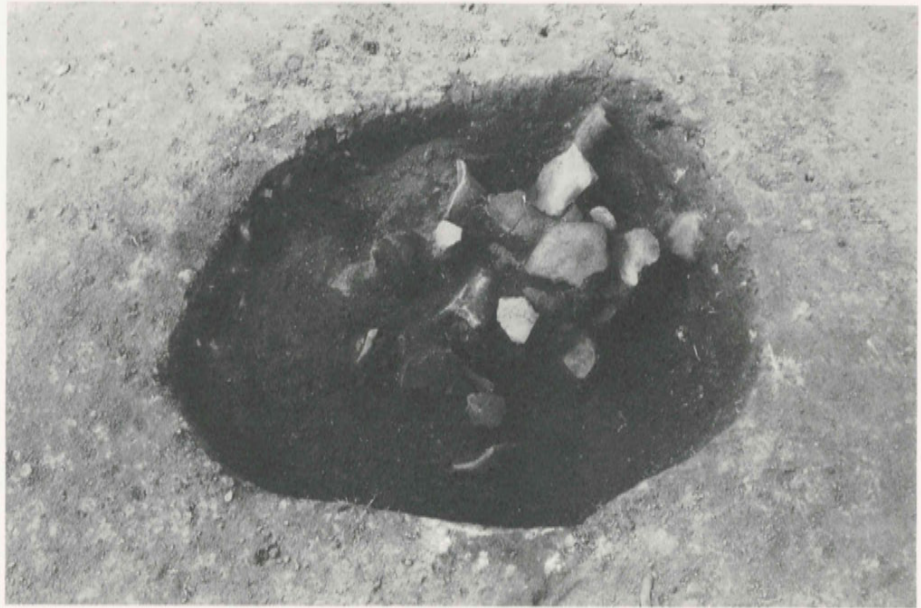


SF08完掘状況
(東から)





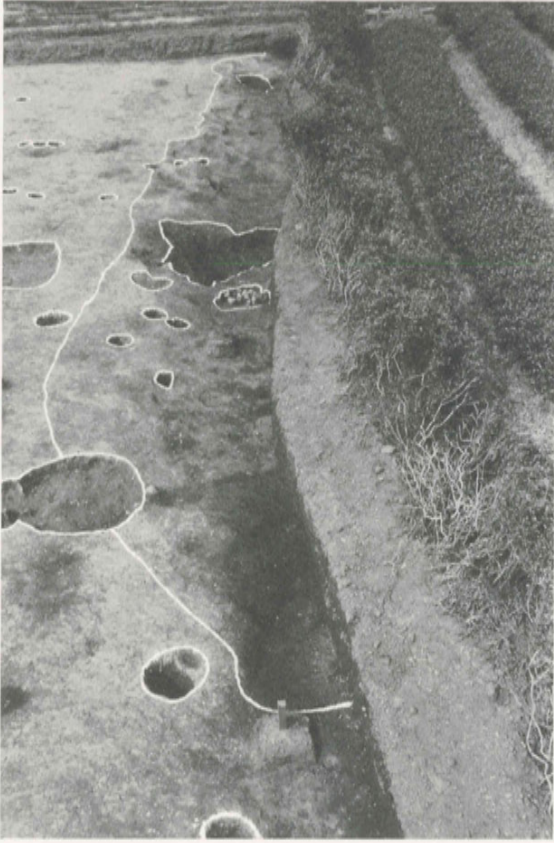
SF09完掘状況
(北から)



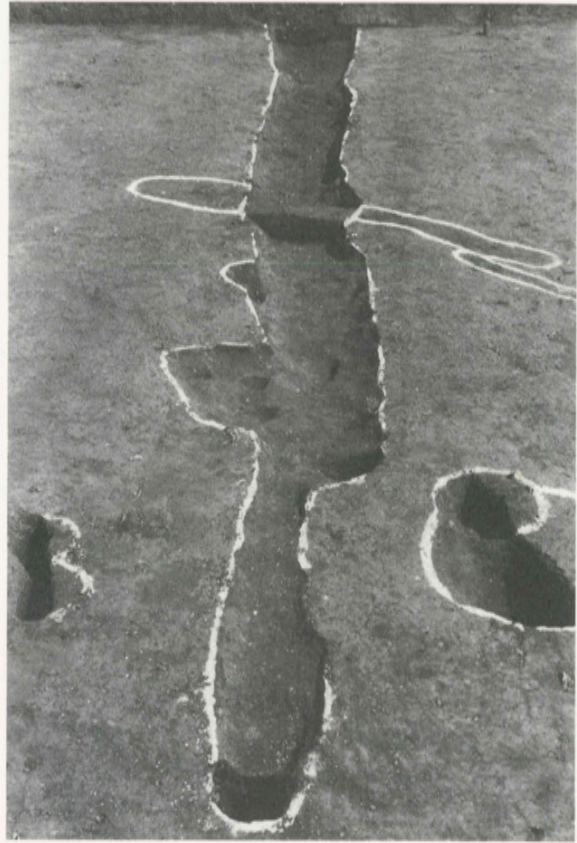
SP197土器出土状況
(南から)



SP244礫出土状況
(北から)



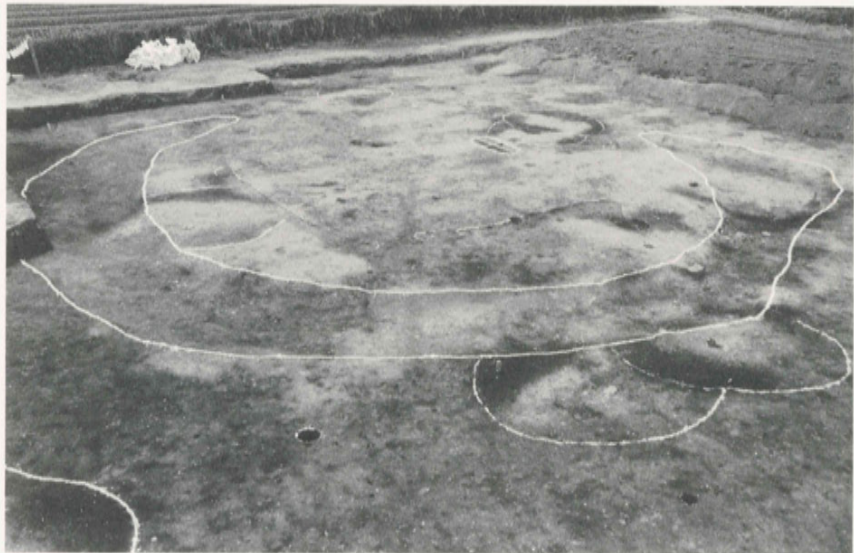
SD01完掘状況(南から)



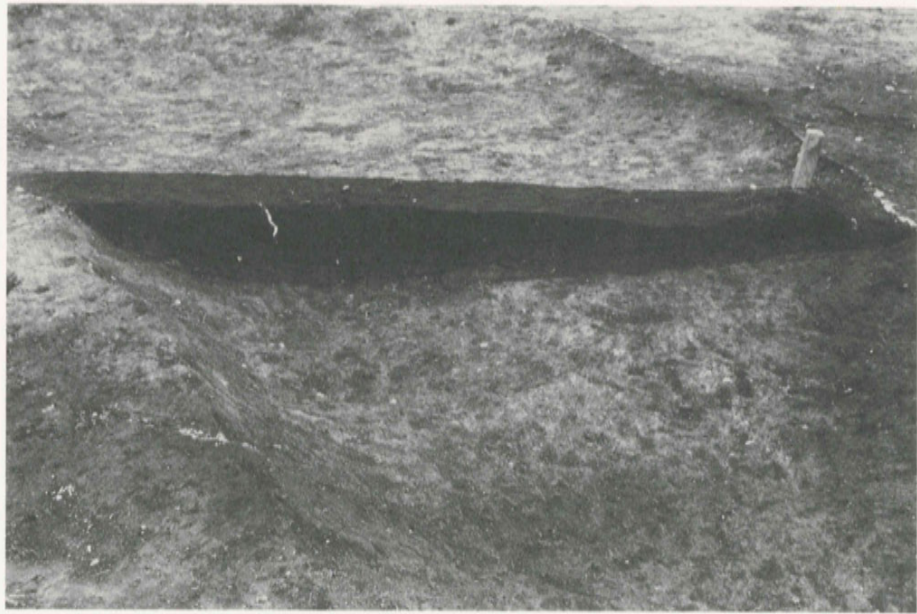
SD02完掘状況(南から)



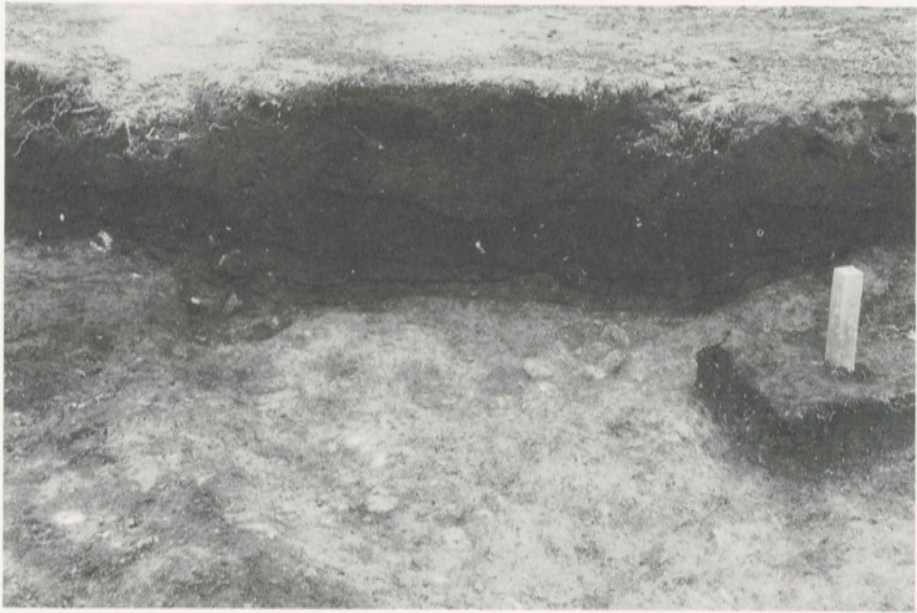
SD03完掘状況
(北東から)



SD03完掘状況
(南東から)



SD03土層確認状況(1)



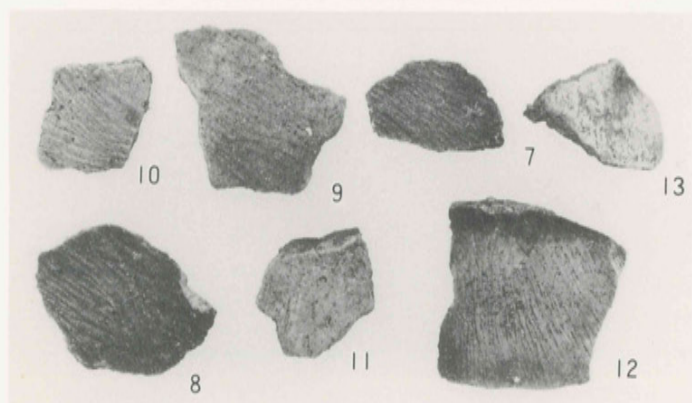
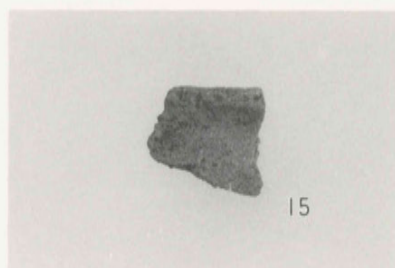
SD03土層確認状況(2)



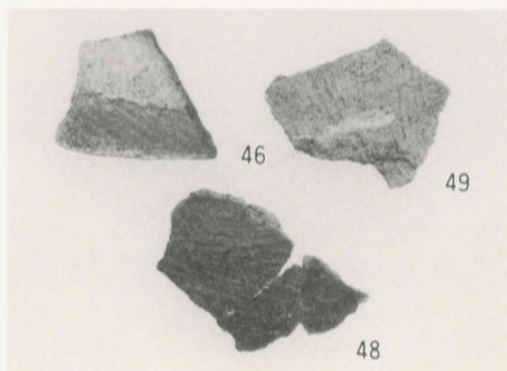
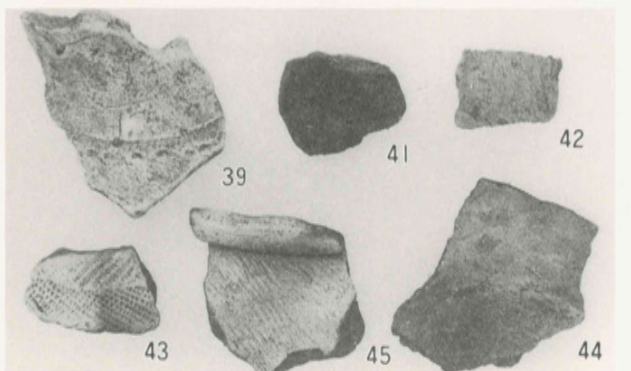
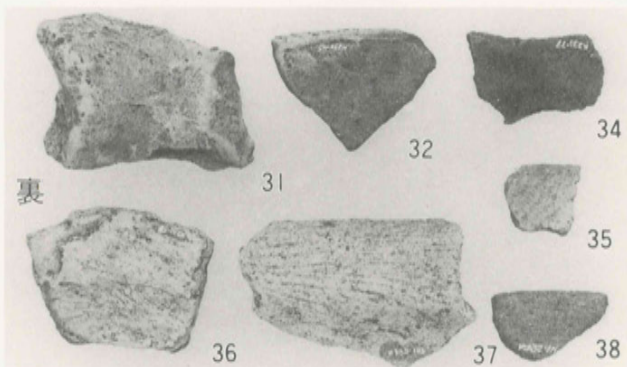
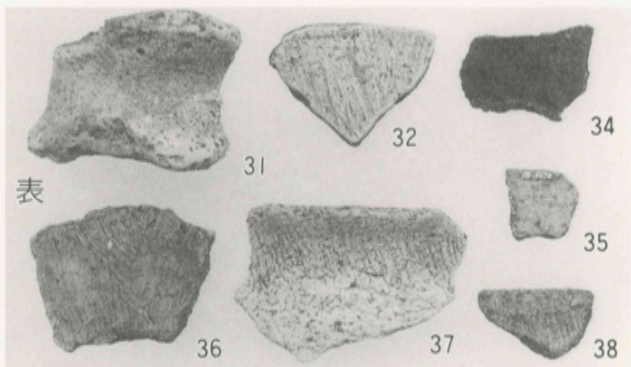
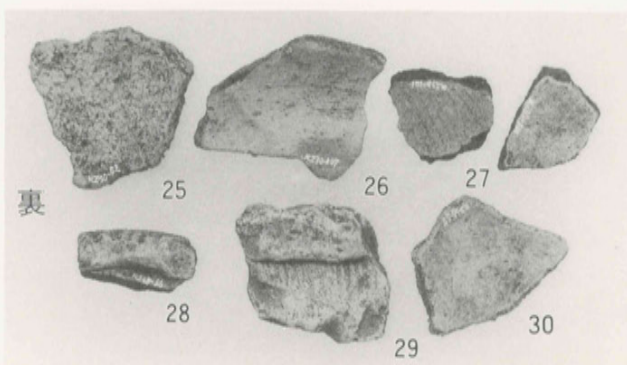
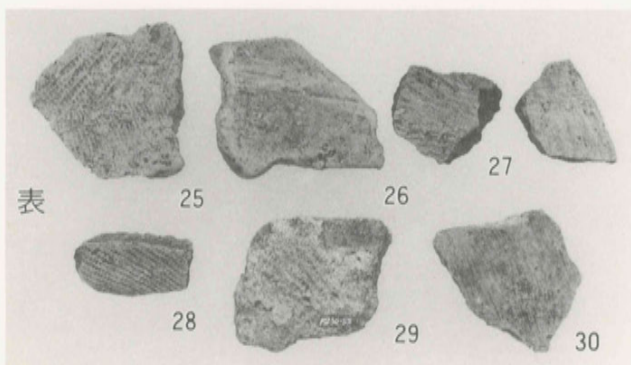
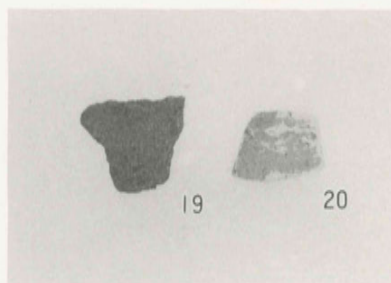
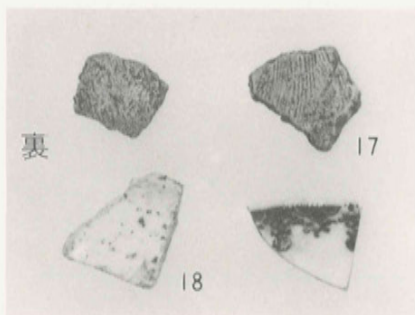
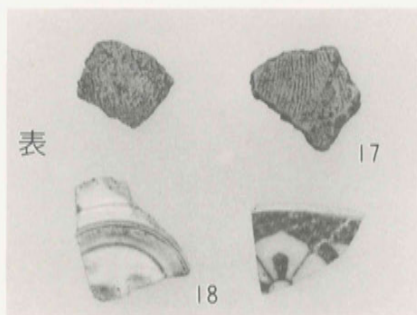
SD06土層確認状況
(北から)



今坂遺跡出土遺物



1 : SB01 2 : SF01 3 ~ 13 : SF06 14 ~ 16 : SF08

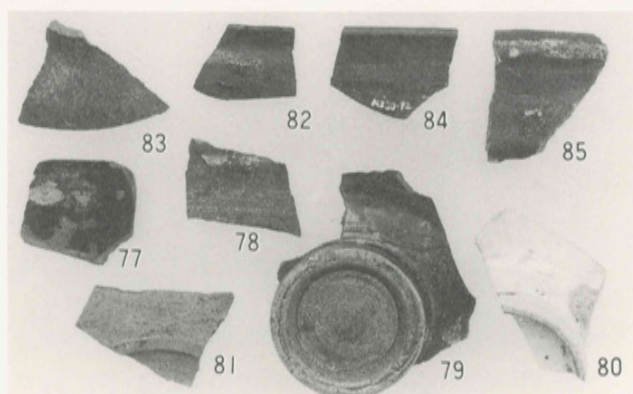
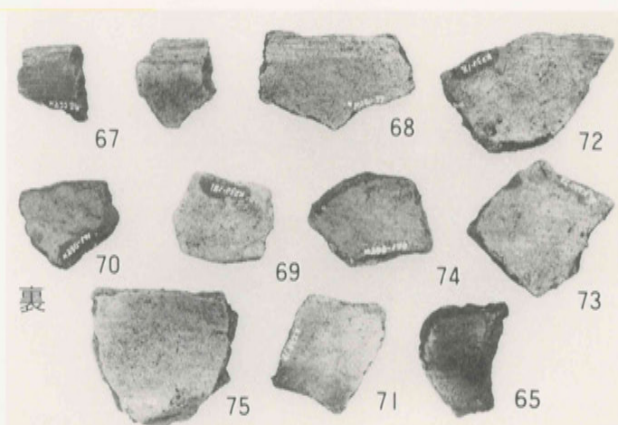
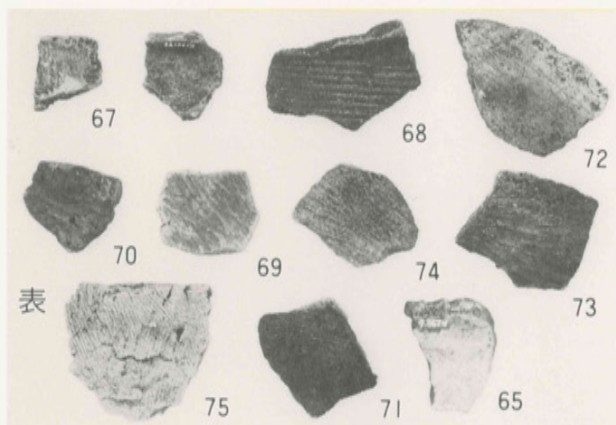
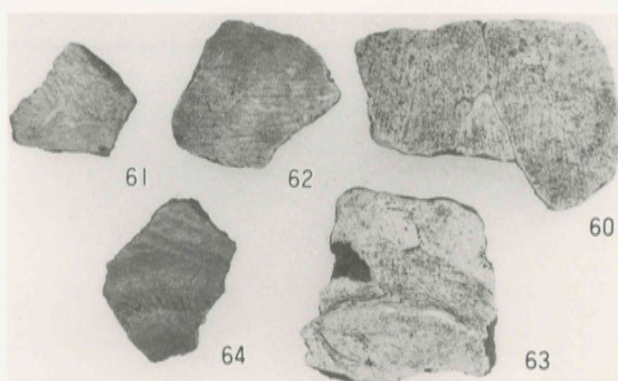
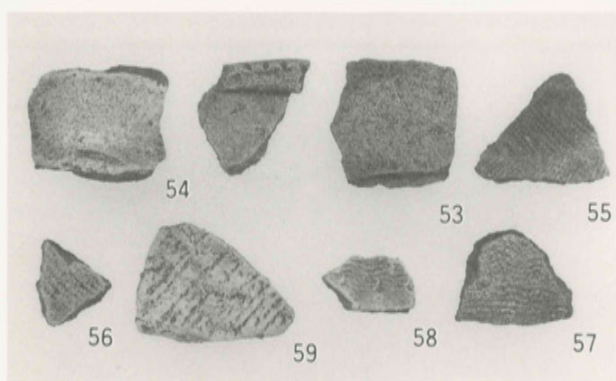
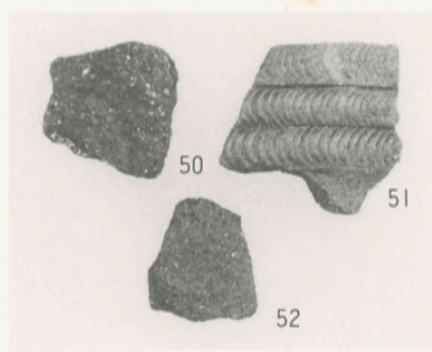


17・18 : SD01

19・20 : SD02

21~24 : SD03

25~49 : SP



33・40・47：SP 50～85：遺構外

高田上ノ段遺跡

発掘調査報告書

昭和61年3月31日

編集発行 掛川市教育委員会
掛川市水垂51
TEL (05372) 4-7773

印刷所 株式会社三創
静岡市中村町166-1
TEL (0542) 82-4031



